
High-End-Arm

紅雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

High - End - Arm

【Nコード】

N4477F

【作者名】

紅雫

【あらすじ】

BH (Black History) 07年。LIBERATOR リベレーター と名乗る組織が突如現れた。彼等は独自の兵器、High - End - Arm (HEA) を使い世界を戦乱の時へと導いた。・・・彼等の目的は。・・・?12/20完結しました。

人物紹介（前書き）

自分の好きなSFロボット小説を書いてみました。恐らくガンム
ちっくなストーリー、設定になっているかもしれませぬ。（^- - ^）
そこら辺は御勘弁・・・

人物紹介

人物紹介

【リベレイター】

ヘイト・ディスター

年齢 16歳

身長160cm

髪の色 ブラック

本作の主人公。

普段から感情を殺しているのが目立つ。

現在の世界政府を否定し憎んでいる。理由は10年前、リベレイターに家族を殺されたから。政府がもっとしっかりしていればこんな事にはならなかった。と彼は思い続けている。

そして、こんな世界を変える為リベレイターに参加した。

ミオ

年齢 ？？歳（外見は12〜15前後）

身長124cm

髪の色 シルバー

リベレイターに参加している少女。銀色の髪が幻想的な印象を醸し出している。年齢は不明だが、童顔なのでおそらく12〜15歳くらいだと思われる。身長も低く、所謂幼児体型。本人は別にどうも

思っていないようだが・・・

ヘイトと同じくH E Aのパイロット。

口数が少なく普段から無表情なので表情から感情を詠むことも出来ない。だがヘイトの前では少しながら表情を出す時がある。

過去の、ある出来事でヘイトと知り合い、ヘイトと共に闘う事を誓った。

セツカ・イシハラ

年齢 25歳

身長 163cm

髪の色 ブラウン

リベレイターのヘイトの上司に当たる女性。

ヘイトを自分の子供のように可愛がっている。

普段は陽気で無邪気な性格をしているが時と場所を弁えているように作戦中にはそんな印象をカケラも見せない。5年前に子供を戦いで亡くすという暗い過去を持ちリベレイターに参加している理由はヘイトと同じく世界を変える為。

リンス・ルウ・ライラ

年齢 17歳

身長 157cm

髪の色 ブロンド

リベレイターのオペレーターの少女。
結構なのんびり屋さん。

マイペースを崩さないのが彼女の特徴。

だが、そんな彼女だがリベレイターのH E AのOSを全て作成した
で有名。機械に強くキーボードの打つスピードは性格に反し神業で
ある。リベレイターに参加した理由彼女いわく『面白そうなので暇
潰しに』らしい。

何もすることが無ければ普段自分が使用しているノートパソコンで
ハッキング等をして遊んでいるらしい。

【ゼニウス】

リオウ・ハルス

年齢 16歳

身長162cm

髪の色 バイオレット

階級 大尉

若干16歳で小部隊の隊長に上り詰めた少年。回りからその才能を
嫉まれているが彼は気にせず生活している。

H E Aの腕前はゼニウスの5本の指に入ると言われている。

ゼニウスに参加したのは昔、隣に住んでいた親友が戦争で亡くなっ
たのが理由。

一刻も早くこんな戦争を終わらせる為に彼は闘う。

因みに彼の部隊は特務隊である上司直属の部隊。

アッシュ・クラウド

年齢 20歳

身長 178cm

髪の色 レッド

階級 少尉

ゼニウスのHEAのパイロット。リオウと同時期にゼニウスに参加した。

当初、アッシュはリオウを認めていなく、リオウに反発していた。

だが、模擬戦をしてリオウにボコボコにされ彼と自分との力の差を痛い程知らされた。

それから彼はリオウの人柄を気に入り彼を慕うようになった。

普段の彼は仲間思いで頼りになる存在。

レンカ・リファイン

年齢 19歳

身長 161cm

髪の色 オレンジ

階級 少尉

ゼニウスのHEAのパイロット。

冷静に物事を判断する能力を買われリオウの特務隊に転属になった。物静かで可憐な少女。

アッシュに少しながら恋心を抱いている。

視力がよく射撃の腕はリオウを抜くレベルを持っている。
その自分の能力を生かし自分のHEAを遠距離仕様に改造している。

人物紹介（後書き）

毎週土曜更新（予定）です。M - 1 : 『ミユトス』に続きます（予告）。

M - 1 : 『 …… ミュトス? 』

BH (Black History) 07年、突然の出来事だった。
『^{リベレーター} LIBERATOR』と名乗る組織からの世界への宣戦布告。当初はただの小組織だと思っていたが彼等の所持していた兵器により戦火は激変した。

人型の兵器『H・E・A (High - End・Arm) “ハイエンドアーム”』これによって世界組織『^{ゼニウス} GENIUS』は苦戦を強いられた。だが、苦戦を強いられていた世界組織はある時『LIBERATOR』の技術を奪取し、自分達も『H・E・A』を開発した。これにより戦火は泥沼状態となった。

BH17年、世界はまだ戦争を続けていた……

BH17年

宇宙

『 …… 準備はいいわね? 』

艦長の女性セツカがヘイト・ディスターに聞く。

「 …… ああ 」

ヘイトはキーボードを叩きながら答える。

そしてディスプレイを見つめ最終調整を行っていた。「ジェネレーター、マニピュレーター、メインスラスタ、オールグリーン…… “ユグドラシル” 安定」

『ヘイトさ〜ん時間ですよ〜！発進出来る〜?』

オペレーターの少女リンスがヘイトに問う。

「了解……ヘイムダル発進する」

ヘイトは連結解除のスイッチを押した。

『 …… 油断禁物 …… 』

いきなりヘイトと同じパイロットの少女ミオが通信をいれてきた。
「フツ、そんなミスはしない」ヘイムダルはそのままカタパルトに
接続され発進体制に入る。

「……少ししたら私も行くから……」

ミオはそう言って通信を切った。

『システムオールグリーン！ヘイムダル発進どぞ！』

リンスは陽気な声で言った。

(全く何時もふざけて……やれやれ……)

「ヘイト・デイスター、ヘイムダル」出る……」

カタパルトはスライドしヘイムダルは宇宙空間へと出た。

「任務開始……」ヘイトはそのまま地球へと向かった。

地球 - 密林 -

そこで『リベレイター』の『H・E・A』(ゲル)が7機、そして

『ゼニウス』の『H・E・A』(ゲリ)が3機、戦闘を行っていた。

『ゼニウス』の『H・E・A』1機が銃を発砲する。

そして敵の『H・E・A』に直撃し爆発した。

「やるな！アッシュ」

『ゼニウス』の小隊、隊長リオウ・ハルスは腰に装備された剣を抜き敵の『H・E・A』の右肩を切りその後頭部を殴り飛ばし相手を
ダウンさせた。

「……流石隊長だ。俺も負けられねえ！」

『ゼニウス』のパイロットアッシュ・クラウドも腰に装備された剣
を抜き敵に切り掛かりに行く。だが、敵は銃を発砲してきた。

『おせえ！』

アッシュはそれを右にジャンプして地を蹴りながら敵の懐へ一気に
積めた。

『あばよ！』

アッシュは握っていた剣を相手のコクピットに突き刺した。バチチ
ツと機体はスパークし爆発した。

敵の『H・E・A』は爆発して砕けた。

「アツシュよくやった・・・レンカ残りをたのむぞ」

『了解、隊長！』

そういつてレンカは残りの敵機を長射程用ライフルを発砲し破壊していった。

「よし！それまでだ！二人ともよくやつてくれた」

リオウはそう言いコクピットを開きヘルメットを脱いだ。

「今回も皆無事に帰れますね」

レンカもコクピットを開きヘルメットを脱いだ。

「本当だぜ。だが少し齒ごたえがなさすぎだな」

コクピットを開きアツシュは愚痴を零す。

「まあ、良いじゃないか。今日も生き残れる事が出来たんだから」

「そうですね、アツシュ」

レンカはクスクス笑う。

「じゃあ、戻りますか？」

レンカはそう言いコクピットを閉めた。

その時、レンカのH・E・Aのセンサーから警戒音が鳴り響く。

「隊長！アンノーン（未確認機体）が接近してきます」

レンカの機体は長射程用にセンサーの範囲が通常の機体より1・5倍まで広げられている。

「なんだと！？だがこの辺りの敵は全て破壊したはずだ！まだ生き残りがいるのか？」

アツシュはコクピットを閉じ銃を構える。

「待つてください！・・・これは！？」

レンカはディスプレイを見て驚く。

「どうした？」

「アンノーンは宇宙から来ます！」

「なんだと！？」

リオウ達は驚く。それは今までに有り得ない出来事だったからだ。

「アンノーン確認！」

レンカは叫ぶ。

レンカのディスプレイにはその機体が映し出される。

アンノーンは白を基準にしたボディをしていた。

そして、今までのH・E・Aとはフォームがまるで違っていた。

「リベレイターの新型か？」

リオウは銃を構える。

「だがたったの1機だけだ。レンカサポートは任せたぞ」

「了解！」

アンノーンはリオウ達の前で静かに着地した。

「何だか知らねえが消えてもらっせ！白いの！」

アツシユはアンノーンに発砲した。

だが銃弾はアンノーンに当たらずその横を逸れていった。

「な！？」

アンノーンはすかさずアツシユに向かって発砲する。

だがそれは実弾ではなく光の粒子だった。

「何なんだよ！？あれは！！」

アツシユは直ぐに横にステップし、回避行動をとったが交わしきれずライトアームを損傷された。

「・・・」

アンノーンは追い討ちをかける。

だがリオウのH・E・Aに阻まれる。

「アツシユ撤退だ！こいつは俺が引き付ける！！」

リオウは剣を抜きアンノーンに切り掛かる。

「だが隊長！あなたは・・・」

「大丈夫だ！だから・・・レンカお前も撤退しろ！合流地点は0073だ！」

リオウはアンノーンをレフトアームで押さえこむ。

「・・・了解。アツシユ行きましょ」

「だが・・・」隊長は大丈夫って言ってるの！隊長を信じよう

レンカは中々動かないアツシユを引つ張り戦場外へと消えていった。

「・・・仲間を逃がしたか自分が犠牲になるとでも言ったのか？」
突然アンノーンからの通信が入る。

リオウは戸惑った。戦闘中に通信をいれるのは有り得ない事だったからだ。自分が殺す相手にわざわざ通信などいれない。リオウは通信を送ったパイロットを不思議に思った。そして返事を返す。

「俺は死なないよ。ただ彼等を逃がすための時間を稼ぐ・・・それだけだ」

リオウは剣をアンノーンに振り下ろす。

だがアンノーンのサーベルがリオウの剣を切断した。

アンノーンのサーベルはさっきのライフルと同じで光の粒子が刃となっていた。

リオウのサーベルはそれで斬られたというより溶かされたようだった。

「中々の自信家だな・・・そんな機体でミュトスを退けようというのか？」

「・・・ミュトス？」

恐らくあの機体の名称だとリオウは理解した。

「・・・少しお喋りが過ぎたようだな」

ヘムダルはサーベルで切り掛かる。

「くっ」

ヘムダルのサーベルがコクピットハッチを切り裂く。

「ま、ただ！」

リオウは腰部に装備された閃光弾を投げた。

そしてリオウの機体は閃光に包まれ消えてしまった。

「く、悪あがきを・・・」

ヘムダルはライフルを発砲する。

だが直撃した音は聞こえなかった。閃光は直ぐに収まったがそこにはもうリオウの姿は無かった。

「・・・逃がしたか」

ヘイムダルのパイロットヘイト・ディスターはヘルメットを脱ぎ咳く。

と、その時通信が入った。通信の相手はリンス・ルウ・ライラだった。

ヘイトは通信を開く。

「・・・なんだ？」

『なんだはないですよ！ヘイトさん何道草食ってるんですか！早く任務を遂行してください！』

リンスの声がコクピットの中を響かせた。

ヘイトは顔を歪める。

「・・・少し黙れ。頭に響く」

『じゃあ早く終わらせて下さい！全くヘイトさ・・・』

ヘイトはリンスの通信を途中で切断した。

このままリンスのぐだぐだ話に付き合わされたらそれこそ任務が遂行出来ないと思ったからだ。

「・・・任務ゼニウスの基地施設の破壊・・・開始」

ヘイムダルは目的地に向かって飛び去った。

機体説明

【リベレイター】

主力H E A

『ゲル』

型式番号 L M P - 0 2

頭頂高 1 6 . 5

本体重量 5 . 3 t

全備重量 7 . 5 t

ジェネレータ出力

9 0 0 k w

スラスタ―総推力

4 0 0 0 0 k g

センサー有効半径

3500m

武装

100mmマシンガン×1

300mmバズーカ×1

3連式ミサイルランチャー×2

【説明】

リベレイターの主力HEA。

全てが実弾装備の機体。機体に係るコストが少なく大量生産されている。

またこの機体は全てAIであり人は搭乗されていない。

そしてこの機体がゼニウスの主力HEAゲリのモデルとなっている。機体のメインカラーはブルーとなっている。

機体の型式番号をフルで書くと（Licenrator Mass Produce）と書き『リベレイターの量産型』と言う意味となる。

【ゼニウス】

主力HEA

『ゲリ』

型式番号 GLB - 11

頭頂高17・0m

本体重量5・8t

全備重量6・3t

ジェネレータ出力

950kw

スラスター総推力

35000kg

センサー有効半径

3200m（ただしレンカのゲリはカスタム機なのでセンサー有効半径は1.5倍の4800mとなっている）

武装

70mmライフル×1

60mm近接防御用機関砲×2

破装剣×1

【説明】

世界組織『ゼニウス』がリベレイターから奪取した機体ゲルを解析し改良された機体でゼニウスの出力兵器となった。形はリベレイターのゲルと多少似ている処がある。

だが性能ではこちらの方が改良されてか性能が上である。しかし、生産面ではコストがゲルより少し高く数はゲルより少し劣っている。そしてパイロットによって装備が変更されている場合がある。

ゼニウスのパイロットレンカはこの機体を自分用にカスタムし、センサー有効半径を強化している。そして長射程用ライフルを装備し、遠距離使用にしている。他にゼニウスのアッシュはスラスターを改造し、高機動型にカスタムしていた。

基本メインカラーはブラウンだがレンカはオレンジ、アッシュはスカレット、リオウはバイオレットとなっている。

型式の意味は（Genius Land Battle）ゼニウスの陸戦型兵器となる。型式で分かるようにゲリは地上専用のHEAである。

因みにリベレイターのゲルは汎用型で宇宙でも使用可能である。

【リベレイター】

《ミュトスタイプ》

『ミュトス・ヘイムダル』

「MYTHOS・HEIMDALL」

型式番号 LM-03H

頭頂高16・0m

本体重量5・5t

全備重量6・2t

ジエネレータ出力

2500kw

スラスタ総推力

30000kg

センサー有効半径

4500m

武装

粒子収束ライフル×1

(ビーム)

粒子収束サーベル×2

(ビーム)

G・Oフィールドシステム×1(重力操作)

【説明】

リベレイターの新型HEA。

白いボディが特徴で新技術G・O(Gravity・Operation)フィールドが組み込まれている。

これは重力、すなわち『引力』、『斥力』を操る事が出来る。これによってヘイムダルは敵機の弾丸等の攻撃を軌道を反らす事が可能となる。通常G・Oフィールドはその能力を維持するのに莫大なエネルギーを必要とした。だが、ヘイムダルの新型ジエネレータ『ユ

グドラシル[®]』によってそれは改善された。
ユグドラシルとは外宇宙からきたと言われる孔雀石マラカイトのような輝きを持つ鉱石である。

これに熱エネルギーを加えると半永久のエネルギー供給が可能となる。このエネルギーをヘイムダルはフルに活用し戦闘出来るようになった。

後にリベレイターはその有り余った莫大なエネルギーを余すなく使用する為に粒子兵器を装備させた。

今まで粒子兵器はエネルギー消費が激しく実戦での使用は不可能だと思われていたがこれによってその新歡を發揮した。(ゲルが粒子兵器を使用した場合3発でエネルギーが無くなった。)
パイロットはヘイト・ディスター！。

型式番号の意味は Liberator - リベレイター・ミュトス Mythos リベレイター の伝説となる。03Hはヘイムダルがミュトス3号機を意味する。
ヘイムダルの名前は北欧神話の光の神からきている。

M - 2 : 『 … やらせない 』 (前書き)

結構、急展開です・・・

ある屋敷にリオウの姿があった。

「 …… そう、報告有難うリオウ 」

ソファーに座っている少女は持っていたティーカップをテーブルに静かに置く。

「 これからどうするんだ？ スズカ …… 」

リオウは少女、スズカの向かいに位置するソファーに座る。

「 そうね …… 貴方はどうしたい？ 」

スズカは少し微笑み問う。窓から吹く風が彼女のセミロングの黒髪を靡かす。

「 …… 解っているくせに意地悪だな君は 」

リオウは立ち上がり部屋を立ち去ろうとする。

「 貴方の機体に言われた通り粒子兵器を装備させたわ 」

スズカはティーカップの中にある紅茶を見つめ言う。

「 だけど粒子兵器はサーベルだけよ。銃はエネルギー消費が激し過ぎるから 」

「 …… サンキュ 」

リオウは振り向かず扉を開け部屋を出て行った。

リオウが出て行った部屋でスズカは一人ティーカップを両手で持ち僅かに揺れて出来た波紋を見つめる。

「 …… ミュトス。遂に表舞台に …… 」

スズカは窓の外に目をやる。外はまだ平和な時を送っていた。

- インド洋海上 -

ヘイトはゼニウスのHEA数十体と混戦していた。

「うああああ!!」

ヘイムダルのビームが空戦仕様ゲリを撃ち抜く。

ゲリは爆発し、爆炎を撒き散らす。

ヘイトはすかさず腰に装備されているサーベルを抜き残りのゲリに切り掛かる。

ゲリはまるでバターのようその装甲を切断された。

「くそおお!!」

1機のゲリがヘイムダルにライフルを発砲する。

だが、その銃弾はヘイムダルには当たらずその横をすり抜けた。

「・・・無駄だ」

ヘイトはGOフィールドを展開した。

「な、何だ？機体が!？」

ゲリはヘイムダルに引つ張られた。

そしてサーベルで腹部を貫かれ爆散した。

「ゼニウス海上基地破壊完了」

ヘイトはヘルメットを脱ぐ。

そして、通信をいれた。

「ゼニウスの海上基地を破壊した」

通信にはリンスが出た。

「そうですね。ヘイトさんはこれで7つの基地を破壊したことになりますね。がんばりますね。」

「・・・次のターゲットは？」

「待って下さい。えとですね・・・次はそこから北西にある基地を破壊して下さい。あ！データ送信しますね。」

リンスはヘイムダルにデータを送信した。

「了解した。」

ヘイトはデータを確認し、通信を切る。

「任務開始・・・」

ヘイムダルは目的地へと向かった。

次のターゲットとなったゼニウスの基地では・・・

「隊長！本当に此処へ奴が来るのか？」

アッシュは丸テーブルに足を乗せ問う。

「ああ・・・今さっき連絡があった・・・インド洋の海上基地が破壊されたとな次に来るとしたらあそこから一番近い此処だろう」

リオウはゲリのコクピットの中でOSを書き換えながら答える。

「よっしゃあ！前回のリベンジをしてやるぜ！！」

アッシュはテーブルから足を退かし勢いよく立ち上がった。

「アッシュ・・・間違っても真つ正面から戦いを挑まないでね。向こうの方が機体スペックが高いんだから」

レンカは呆れながらアッシュを注意する。

「ああ、それとでしゃばって撃墜されないようにね」

レンカはクスクス笑いながら言う。

「な、何だと〜！」

アッシュはレンカに掴もうとしたがレンカはヒョイツと交わしケラケラ笑う。

「嘘よ・・・アッシュがそう簡単に落とされる筈ないもんね」

そしてレンカは自分の機体へと足を運んだ。

「けっ！可愛くない女だ・・・」

アッシュも自分の機体へと歩いていった。

「・・・目標捕捉。攻撃を開始する」

ヘイトはライフルを放つ。

ビームはコンテナに命中し爆発する。

すると、敵のHEAゲリが数十機現れた。

ゲリはヘイムダルの回りを囲うような配置になった。

そして、全機がライフルを放つ。

「・・・無駄な事を」

ヘイトはGOフィールドを展開し、攻撃を回避する。

すると流れ弾は回りを囲っていたゲリ達に命中した。

回りのゲリ達は次々と爆発していった。

爆発の煙りがヘイムダルを包み込む。

「・・・破壊する」

ヘイムダルはライフルを構え、撃つ瞬間・・・

下から光の粒子がヘイムダルを襲った。

「・・・！？これは！？」

ヘイムダルは間一髪それを交わす。

「あちゃ〜、外しちゃった！」

レンカはスコープを見つめ後にライフルを撃つ。今回のレンカの装備はエネルギーを基地から供給し、それをライフルに集め撃つていた。

「・・・くっ！」

ヘイムダルはそれを交わしライフルを構える。

だが・・・

「やらせるかよ！白いの！！」

アツシュがヘイムダルに飛び掛かり剣で切り掛かった。

ヘイムダルは構えるのを中断しそれを交わす。

「・・・チツ！邪魔だあ！」

ヘイムダルはライフルを乱発する。

だが、ビームをアツシュは全て避け、ヘイムダルに詰め寄る。

「ハハハ！当たるかよ！」アツシュは剣を頭上から振り下ろした。

「・・・虫けらがあ！」

ヘイトは叫び腰に装備されているサーベルを抜きアツシュの剣を切

断した。

「へ！甘いぜ」

アッシュは後に剣を抜きヘイムダルに切り掛かった。

アッシュの刃はヘイムダルの腹部に命中したがヘイムダルの装甲は無傷だった。

「なんて硬え装甲だ」

アッシュは少し距離をとる。

「・・・消えろ！」

ヘイトはアッシュに切り掛かろうとした時、警報音がヘイムダルのコクピットに響き渡る。

「ちいい！」

ヘイムダルに向かってビームが襲った。

それはヘイムダルのレフトアーマに命中した。

さっきの攻撃とは違いヘイムダルのレフトアーマは熱で溶けていた。

「へ！どうやら粒子兵器はきくようだな」

アッシュは怯んだヘイムダルに追撃する。

「実体兵器でも何回もダメージを与えればあ！」

アッシュはレッグに装備されていたコンバットナイフを抜きヘイムダルの溶けたレフトアーマに突き刺す。

ナイフはレフトアーマを貫きアーマのところまで突き刺さった。

レフトアーマにスパークが走る。

「き、様らあ！」

ヘイトはGOフィールドを展開した。

そしてアッシュを引き付ける。

「な、機体が引っ張られる！」

ヘイトはライフルを構えアッシュに放つ。

ビームがアッシュを襲う。

「く！少しでしゃばり過ぎたか」

だが、ビームはアッシュに当たらずアッシュの前に立ちはだかったバイオレットカラーのゲリにより弾かれた。

「アツシユ無事か？」

リオウはサーベルのエネルギーを切り問う。

「余裕すよ！まあ、今のは少しやばかったけどな」

「じゃあ援護を頼む」

「了解だ」

リオウはサーベルにエネルギーを送り刃を形成する。

（サーベルの維持は二分が限界だ！それまでにケリをつける！！）

リオウはヘイムダルに切り掛かった。

「くう！！」

ヘイトはそれをサーベルで受け止める。

鏝せり合いが続く。

と、その時背後からアツシユが向かって来てヘイムダルのバックを切り裂く。

バチチツと、ヘイムダルのコクピットにスパークが走る。

「ぐあ！！」

ヘイトは怯むが力を込め持ちこたえる。そしてリオウを押し返す。

だが、その瞬間にレンカのビームが襲って来た。

それはヘイムダルの胸部に命中し、装甲が破損した。

「・・・ハア、ハア」

ヘイトはサーベルを収めライフルで迎撃する。

だが、リオウはそれをさせずヘイムダルに切り掛かる。

（残り時間一分を切った。仕留める！！）

リオウはサーベル奮う。

ヘイトはそれを間一髪に交わす。

だが、その後のアツシユの斬撃は交わせず腹部に命中する。

ヘイムダルのコクピットに浚にスパークが走る。

（此処までなのか・・・）

ヘイトはなんとかヘイムダルを持ちこたえさせる。

だが、目の前にはリオウが迫って来ていた。

（く！間に合わない）

「墮ちろ!!ミユトス」

リオウはサーベルを振り下ろす。

(やられる・・・)

リオウがヘイムダルを切り掛かる瞬間・・・

リオウのゲリのサーベルを持っていたアームが爆発した。

「!!なんだ!?!」

後に謎の攻撃がリオウを襲う。

「上か!」

リオウは上空を見上げる。

だが、太陽で何も見えなかった。

上空から後に攻撃が続く。

リオウはそれを交わす。

「新手なのか?レンカ撃てるか?」

「やってみます」

レンカはライフルを構えた、が上空からの攻撃でライフルは撃ち抜かれてしまった。

「ビーム!?!」

レンカは上を向く。上空から黒い戦闘機が姿を現した。

「こいつか!?!」

アッシュは戦闘機に向かって切り掛かった。

だが、上空からの攻撃が続いていた。

「ちいい!」

上空から後にグレーのボディをしたH E Aが現れた。

「な!まだいたのか!?!」

グレーのボディをしたH E Aはヘイムダルと、似たフォームをしていた。

「ミユトス・ヨルズ行くよ」

ヨルズはバックパックに装備されていた粒子収束砲を展開する。

二つの砲身はアッシュのゲリを捕えた。

「いっけ」

高圧縮された粒子がアツシユを襲つ。

「ぐうう！」

アツシユはそれを避けるが高圧縮の粒子に耐えられなかったゲリは装甲がズタズタになった。

「やっべえよ！あんなの喰らつたら絶対死ぬぜ・・・」

「アツシユ、此処は退くんだ・・・計算外だ！レンカも」
リオウはレンカにも呼びかける。

「ですが、あの白い機体だけは！！」

レンカは剣を抜きヘイムダルに切り掛かる。

「くっ！」

ヘイトはサーベルを抜き構える。

だが、さっきのダメージでヘイムダルの動きは鈍っていた。

「・・・やらせない」

突然ヘイムダルの前にさっきの黒い戦闘機が立ち塞がる。

そしてその戦闘機は一瞬でミュトスタタイプのH E Aに形を変形させた。

「嘘！？」

「・・・ミュトス・ノート」

レンカは驚いている一瞬の隙をついて黒いH E Aはシールドから粒子の刃を出現させレンカのゲリを切り裂く。

ゲリはライトアームを切断された。

「くっ！」

レンカは少し距離をとる。

「レンカ！！退くんだ！撤退だ！」

「・・・はい」

レンカはリオウの横に並びライフルを牽制に使い撤退した。

2機のミュトスは追う気配を見せなかった。2機のミュトスは敵を追わずヘイムダルに近付いた。

「・・・大丈夫？」

ヘイムダルのディスプレイにミオの顔が写った。

「大丈夫ですか？」

反対側にはリンスの姿が写った。

「・・・お前ら」

ヘイトは驚いた。ミオが現れたのにも驚いたが1番に驚いたのはオペレーターのリンスの姿が此処にあったことだ。

「まあ、話しはいつぱいあると思いますが今はこの場所から離れましょう。セツカさんも待っていることですし」

リンスはそういつて半壊したヘイムダルを抱え飛び立った。

その後ろにミオが機体を戦闘機に変形させ後に続いた。

機体説明

【リベレイター】

《ミュトスタイプ》

『ミュトス・ヨルズ』

【MYTHOS・YOLZ】

型式番号 LM-02Y

頭頂高 20.5m

本体重量 6.8t

全備重量 8.5t

ジェネレーター出力

6000kw

スラスタ―総推力

45000kg

センサー有効半径

4000m

武装

超粒子圧縮砲 x2

高粒子収束砲 x2

拡散粒子砲 x1

対近接用兵器高粒子サーベル × 2
近接防御用粒子砲 × 4
高粒子発生フィールド × 1

【説明】

リベレイターの新型H E A。

対拠点制圧用に開発されたこの機体の武装は他のH E Aとは比べものにならないほどの火力を持っている。

両のマニピュレーターに装備されている高粒子収束砲はヘイムダルの粒子砲を軽く凌駕している。その破壊力は現在のH E A数機を一撃で破壊することが可能。

他に、バックパックに装備されている超粒子圧縮砲は腰部に展開させて発射可能。だが、エネルギー充填が遅くその間機体はその場に待機しなければならない。それは充填までの時間敵の攻撃を浴び続ける事を意味する。だが、ヨルズは高粒子発生フィールドを使用し防ぐ事が可能。

高粒子発生フィールドは一定の間、粒子の膜を機体の周りに発生させ、バリアーの役目を果たす。

このフィールドは実弾の他にも粒子兵器を防ぐことも可能。だが、エネルギー消費が激しく乱用は出来ない。

後にヨルズは胸部に装備された拡散粒子砲により広範囲に拡散された粒子で周りの敵機を撃墜することが出来る。

もはや、動く要塞である。

そして、遠距離攻撃が得意なのは勿論、近接攻撃も得意とする。腕部（手首辺りに収納されている）に装備されている高粒子サーベルは通常の1.5倍の長さを持っており、H E Aの装甲をバターの用に熔解し、切断することが出来る。

おそらく火力・破壊力では最強のH E Aだと思われる。

だが、この機体には最大の欠点があり、これほどの武装を使いこなせるパイロットがいないということだ。

高粒子砲を始め、圧縮砲、フィールド、サーベル等のエネルギー充填は全て手動で行わなければならない。
戦闘中でこれら全てを行う事は不可能に等しい。
だが、この欠点を一人のパイロットが何も苦にせず平然と行っていた。

(説明2に続く・・・)

【リベレイター】

《ミュトスタイプ》

『ミュトス・ノート』

【MYTHOS・NITT】

型式番号 LM-01N

頭頂高 17.0m

本体重量 5.2t

全備重量 6.0t

ジェネレーター出力

3000kw

スラスタ総推力

30000kg

センサー有効半径

5000m

武装

速射型粒子ライフル×1

複合兵装攻盾フリームファクシー×1

粒子サーベル×2

【説明】

リブレイターの可変型H E A。

史上初の可変機構が組み込まれたこの機体は他の機体とは違い構造がまるで違う。関節部分の強度の強化によりスムーズな可変が可能とした。

可変機構を組み込まれた事により一撃離脱を可能とする。

可変すると戦闘機の形へと変わる。

主な武装は速射型粒子ライフルである。出力は低めだが、それによって連射が可能となっている。

そしてレフトアームに装備されている複合兵装攻盾フリームファクシーである。この盾は先端に大型粒子ソードが装備され、後に二門の粒子砲が装備されている。

攻撃を防ぐのは勿論、盾での攻撃が出来る。

この盾は戦闘機時はコクピットを守る為、コクピットを覆うようになってる。なので盾の強度は高い。

パイロットはミオ。

機体のメインカラーはブラック。

名前の由来はその機体のカラーにあった『ノート“夜”』。北欧神話の女神の名である。

【リブレイター】

『ミュトス・ヨルズ（真）』

型式番号 ヨルズと同じ

頭頂高 ヨルズと同じ

本体重量 ヨルズと同じ

全備重量 7.0 t

ジェネレーター出力

4500 kW

スラスタ―総推力

30000kg

センサー有効半径

8000m

武装

超射程粒子スナイパーライフル×1

高粒子スナイパーライフル×1

近距離用粒子拳銃×2

近接防御用粒子砲×4

電子妨害システム×1

【説明2】

上記のヨルズと違いこのヨルズは遠距離用スナイパー型のHEAである。

本来ヨルズはこの姿であった。だがヨルズのパイロット、リンスはこの機体を独自に改良、アレンジによって現在の姿となった。

この機体を開発したメカニックは当然、「止める！！機体バランスが崩れる！！」と叫び反対したが、「遠くでちまちま蠅を落とすだけじゃつまんな〜い」と言いメカニックの言葉を無視し、一人で勝手に改造してしまった。

そして上記のような化け物機体となってしまった。

本来のヨルズは電子妨害システムによっての電波妨害を行い、自機の反応を消し隠密で敵を撃ち抜くという戦術を持っていた。

そしてサーベルは装備されておらず近接時は粒子拳銃、近接防御用粒子砲による攻撃を行う。

粒子拳銃は近接用として設計されたため射程は短い。だが、威力は高くまた、連射が可能という長所を持っている。

メインカラーは本来迷彩としてグリーンだったがやはりパイロットのリンスが『こんな色やだ〜』と文句を言い塗装が剥がされた。なので現在のカラーは装甲の金属そのままのグレーとなっている。

名前の由来は『ヨルズ“大地”』¹⁴。
北欧神話に出て来る女神の名である。

「・・・まったく、えらくやられたモノだな」

男は頭を掻きながらヘイムダルを見つめる。

「そうですね。でも仕方のないことじゃありません？この機体は完成されずに戦場に出たのですから」

セツカはヘイムダルのコクピット周りのフレームを摩りながら呟く。
「だが、それでも酷すぎるんじゃないか？こりゃあ、パイロットも悪いと思うぞ？」

「ウインさん、彼はまだ子供です。仕方ありません」

(子供はまだ精神が脆すぎる)

男・・・ウインロットはセツカの言葉を聞き溜め息を吐く。

「今はどうこう言っても仕方がないな・・・まずはこいつの修理をしなきゃならんからな」

ウインはヘイムダルのレフトアーマーの傷を見つめる。

(・・・妙だな。あれは高熱によって溶かされた後だな。粒子兵器か？・・・だが、粒子兵器はまだ実用段階には至っていないはず・・・)

「・・・今はそんな事を考えている場合じゃないか・・・」

ウインは溜め息を吐きゆっくりと歩きその場を後にした。

ウインの後ろ姿を見つめセツカは溜め息を漏らす。

「どうしたんだ？」

セツカの背中を一人の男がポンツと手を置く。

体格がズシツとした頼りになりそうな男だった。だが、特に目立ったのは右頬にある傷痕だった。

「ジン・・・なんでもないわ」

セツカはジンの手を払う。そしてその場を去ろうとした。

「あんまり自分を追い詰めるなよ？」

「解ってる」

セツカはカタパルトデッキを後にした。

「・・・解ってないだろが」

ジンは呆れ、溜め息を吐く。

（さて、今頃あいつらは街で生き抜きしているところか・・・いや、生き抜きをしているのはリンスだけかもしれないな。あの二人が生き抜きをしているとは思えないな・・・）

* * *

とある貿易都市にヘイト達はいた。ヘイムダルの修理の間、『少し街で遊んでこい』とセツカが言ったからである。当然ヘイトは拒否した。

だが、ヘイトの拒否権を無視しセツカはヘイトを外へと放り出した。ついでに、ミオ、リンスも放り出された。

「ヘイトさん、何時まで不機嫌面を続けるのですか？」

リンスはヘイトの横に並び顔を覗き込む。

リンスの着ているピンクのワンピースは風に靡く。

「・・・」

ヘイトは顔を背け無言を貫き通す。

ヘイトの服装はグレーを基準にした地味な服装だった。

「・・・ヘイト、不機嫌」

ミオはリンスのワンピースを引つ張りヘイトから引き離す。

ミオの服装は黒を基準としたやはり地味な服装だった。

だが、服装は地味だがミオのシルバーの髪は充分に目立っていた。

「でもね、何時までもこの調子だとこちらも疲れるのですよ」

リンスは少し困った顔をしてミオを見下ろす。

「・・・疲れるんだったら俺から離れたら良い・・・」

ヘイトはボソツと答える。だが、その顔はリンスの方を向かず正反對の方を向いていた。

「ですが、一人ですと迷子になってしまいますよ」
リンスはそういつてミオと手を繋ぎヘイトに見せる。

「……ヘイト…迷子する……」

ミオは無表情な顔でヘイトに注意する。

「心配ない……此処は俺の知っている街だからな」

ヘイトは周りの町並みを見渡し言う。

「そうなんですか！？初耳です」

リンスは目を丸くする。今までヘイトは自分の事については何も語らなかつたからだ。

「……じゃあな」

ヘイトはリンス達とは別方向の道へと向かう。

「待って下さい！！どこ行くんですか」？

「別に、俺の勝手だろ？」

「では、せめてこれを持って下さい」

リンスはヘイトに向かって正方形の薄い物体を投げる。それはヘイトの掌に収まる。

「それには私の番号が入ってますから、何かあった時はそれで連絡してください」

リンスはニコツと笑う。

「……」

ヘイトはそれをポケットに収め人込みの中に消えていった。

「……ヘイト……」

ミオはヘイトの消えていった人込みを少し淋しそうな声で小さく呟く。

そんなミオの態度に心配したリンスはミオの肩に手を置く。

「ミオちゃん、私と一緒に洋服を買いに行こう」

「……え？」

ミオはリンスの方を振り向く。

「だってミオちゃんってさ、あんまりオシャレしないじゃない」。

だから今日はミオちゃんのお洋服を買いに行こう」

リンスはミオの手を引つ張る。ミオはリンスに成す術も無く引つ張られてしまった。

* * *

「・・・」

ヘイトは街の中心部を抜け街の外れに来ていた。

そこは建物が半壊しているものもあれば殆ど建物の形をしていないものまでがあった。

「・・・時が経っても此処は何処も変わってないな」

ヘイトは少し哀しみの顔を見せる。だが、その表情は直ぐに消え奇立ちの色へと変わる。

「・・・父さん・・・母さん・・・」

ヘイトの内から黒い感情がはい上がってくる。

（なんで！？どうして！？助けてくれなかつたんだ！！憎い！！俺の場所を奪った奴が！！憎い！！この世界が！！）

ヘイトは感情に任せレンガで出来た壁を殴る。レンガで出来た壁は脆かったのか、それともヘイトの力が強かったのかポロツと崩れた。ヘイトはそれを冷たく見つめ、瞳から一滴の水滴を流す。そしてヨロツとあどけない足取りで歩きだす。

ヘイトの向かった先は何も存在しない空き地だった。ヘイトは空き地の中心まで歩きその場に座り込んでしまった。

「・・・スズカ」、もし今の俺を見たらお前は どうする？怒るのか？哀しむのか？」

ヘイトは自分の掌を見つめる。今まで何人もの命を奪った汚れた掌を・・・

ヘイトは昔、この街に暮らしていた。何も変わらない普通の少年だった。

毎日平和に暮らしていた。その日が来るまでは・・・
虐殺だった・・・リベレイターの・・・

リベレイターはヘイトの屋敷をいきなり攻撃を仕掛けて来た。そしてヘイトは父、母を失った。だが、ヘイトだけは助かった。母がヘイトを庇ったからだ。その時の光景をヘイトは今でも覚えていた。世界が真っ赤に染められた光景を・・・

リベレイターはその後退却したがヘイトは恐怖に支配され動けなかった。だが、恐怖の他にも憎しみという感情が支配していた。それは、リベレイターが現れたのにゼニウスが自分達を助けに来なかったことに・・・

そのあとヘイトは、母の屍の中にいるところを一人の青年に発見された。長い黒い髪は風によって靡いていた。

青年は問う。『力が欲しいか』と・・・

そしてヘイトはその問いかけに頷き答えた。

青年は手を差し延べる。

ヘイトはその手に手をのばした・・・

ヘイトがリベレイターに参加した瞬間だった・・・

ヘイトは立ち上がる。

「・・・あの時出会った男は結局何者だったんだ？」

あのあとヘイトはあの青年には会っていないかった。

おそらくリベレイターの一員だとは思いますが、あの青年はあれからキツパリと姿を消してしまった。

「今更考えても仕方がないか・・・」

ヘイトは空き地から出て歩きだそうとした時、後ろから呼び止められた。

「アキラ？・・・なのか？」

ヘイトは驚き振り向いた。その名前はリベレイターに入る以前の名

前だったからだ。

「お前は・・・!?」

ヘイトは呼び止めた少年を見詰める。

少年のバイオレットの髪が靡く。

「リオウ・・・」

ヘイトの口が自然に動いた。その名前は彼の唯一の親友の名前だった・・・

* * *

「うん、流石ミオちゃんね、素体が良い性が良く似合ってるよ」

リンスはミオの姿を見て笑顔を零す。

「……………」
ミオの服装はレースが入った黒い服・・・所謂ゴシックローリータだった。

そしてそれは童顔のミオには良く似合っていた。後に自前のシルバ―のセミロングの髪がミオをゴシックローリータを輝かせた。

「フフフ 後はこれを付けてっ」と

リンスは不敵な笑みをしながらミオのセミロングの髪をポニーテールになるようにリボンで結んだ。勿論そのリボンもミオのゴスロリに合うように黒いレースの入ったリボンだった。

「……………」

「キャウウウ~~~~!! 可愛い~~~~!! ミオちゃんその可愛さは殺人級だよお」

リンスはミオを強く抱きしめる。ミオの顔はリンスの豊富な胸に埋もれる。

「お持ち帰りだね 本当に」
ミオの髪をリンスは頬ずりする。

「い
ミオは胸に埋もれながら小さく呟いた・・・」

ヘイトはリオウに連れられゼニウスの要とも言えるH E A製造社『
フューチャー
FUTURE』に来ていた。

「どうして連絡を寄越さなかったんだ？責めて生きている事を伝えるだけでも……」

リオウはエレベーターのボタンを押す。そして最上階の階を押した。
「……」

「まあ、良いさ……スズカが喜ぶ筈だから」

エレベーターは上へと進む。そして最上階に到着し扉が開いた。

そこは赤い絨毯が一面に敷かれた部屋だった。

リオウは扉を開きヘイトを中に誘う。ヘイトは無言でその中に入った。

そこに居たのは黒いロングヘアの髪をした少女がデスクに座っていた。

少女は無言でヘイトを見つめた。

「……スズカ」

ヘイトはその少女を見て名前を呼ぶ。

「……」

スズカは相変わらず無言のままヘイトを見つめた。

「おい、スズカ！アキラが生きてたんだ！何か反応しろよ？」

リオウはスズカの横に駆け寄る。

「リオウ……どうして彼を連れて来たの？」

「え！？」

リオウは思っていた反応とはまるで違ったスズカに驚く。

「それに貴方もよ、アキラ……いえ、今は『ヘイト・ディスター』
だったかしら？」

スズカは立ち上がりヘイトを睨む。

「何を言ってるんだ？スズカ」

リオウは戸惑う。

「どうやら全て知られているようだな・・・」

「ええ、全く呆れるわ。まさかりベレイターに参加していたなんてね？」

「な・！？」

リオウはスズカの言葉に驚きもはや戸惑いを隠せずにいる。

「どうしてリベレイターに参加したのかしら？返答次第では私は貴方を殺しますわ」

スズカの冷たい瞳がヘイトを貫く。

「・・・ゼニウスを潰す・・・そのためには力が必要だった」

「おい！おかしいだろう！？お前の家族を殺したのはリベレイターだろ？なら、憎むのは普通リベレイターだろ！？」

リオウは叫ぶ。

「確かに俺の親を殺したのはリベレイターだ。憎しみもある。だが、ゼニウスは何も助けに来てくれなかった！！あんなに激しい攻撃だ。普通気付くだろ？でも、ゼニウスは気付かぬふりをして、俺や父さん、母さんを見捨てた！俺は絶対に許さない！ゼニウス、世界を信じない」

「・・・貴方はリベレイターがどういう組織か知っていますの？」
スズカはパソコンのキーボードを叩き問う。

「・・・人を束縛するものの解放だろ？」

「確かにリベレイター（LIBERATOR）とは『解放者』を意味します・・・でも、それは貴方の言っている人々を支配から解放するという意味ではないと思う・・・」
と、その時外から爆音が響き渡らせた。

「！？なんだ」

ヘイトは急ぎ窓に向かい外を眺める。

外は爆炎を撒き散らし建物は次々に飲み込まれていく。そしてその中からリベレイターのHEAゲルが数十機現れた。

「な、何故リベレイターが民間地を・・・」

ヘイトはこの光景にくぎづけになり眩いた。
スズカはリオウに出撃命令を出し、ヘイトの横に歩み寄りその光景を見つめた。

「これがリベレイターよ・・・確かにリベレイターは解放者よ。でもねそれは人々の解放じゃない。地球を人の支配からの解放なの・・・そのために彼等は人の抹殺を続けているわ」
スズカはヘイトを見つめる。

「・・・どうするの？貴方はこの現実を見て・・・これが貴方の目指す世界なの？」

ヘイトは視線を反らし俯く。そしてリンスに渡された携帯電話を手に持ち逃げるようにその場を後にした。

「・・・アキラ貴方は世界を見なさ過ぎる・・・もう一度考え直しなさい・・・貴方にはこの血塗られた世界を変える事が出来る力があるのだから」

スズカはデスクの上にあるパソコンを見つめた。ディスプレイには『SYSTEM“R”HEIMDALL』と写し出されていた。

* * *

時は少し遡りリンスとミオは爆撃されている街の中を走っていた。

「ハア、ハア、なんでゲルが民間人を攻撃してるの〜！」

リンスはミオの手を繋ぎ走る。

ミオは薄い長方形型の通信機でセツカと連絡していた。

「.....了解.....ポイントFに向かう.....」
ミオは通信機を服の中に入れる。ミオの今の服装はゴシッククロリータだったので入れるポケットがなかった。

「.....リンス海岸沿いに.....」
「わかったよ〜」

リンスはミオを抱き抱え海岸沿いに向かう。ミオは小柄なのでリン

スは楽々に抱き抱えた。

「それでどうやってノートを受け取るの？」

リンスはミオの顔を覗き込む。

「……飛び乗る……」

ミオはさらつと言った。

「あはは・・・マジなの？(^ - ^)」

リンスは引き攣り聞き直す。

「……マジ……」

やはりミオはさらつと言う。普通移動中のH E Aに乗り込む者はいない。もし少しでもタイミングを逃せばコクピットに乗り込めず機体に轢き殺されるからである。

しかも今のミオはゴシッククロリータである。動きにくい服で飛び乗る事は死に行くようなものであった。

そしてリンス達は目的地へと着いた。

リンスはミオを下ろす。

「ねえ、やっぱり止めなよ、ミオちゃん死んじゃうよ」

リンスはミオの手を握る。

「……来た……」

ミオは海上から来る小さな黒い影を見つけた。

「……リンス、心配しない、大丈夫だから……」

ミオはリンスの手を優しく振りほどく。

黒い影はどんどん近づいて来る。

「ミオ……」

リンスはコクリと頷き数歩後ろに下がる。

「……じゃあ……」

ミオは崖を飛び降りた。

そして戦闘機状態のノートのシールド部分の上に取り付いた。

「……」

ミオは風に扇がれながらも這うような体制で前へと進む。

そして少し出っ張っている箇所の手を置く。
すると、その出っ張り部分は開き中にスペースが現れた。ノートの
コクピットだった。

ミオは滑るようにその中に入った。此処まで掛かった時間は僅か十
数秒だけだった。

「……………」
ミオはシートに座りハッチを閉めた。そしてディスプレイに掌を置
き指でそこを数回弾くように叩いた。すると回りに明かりが灯りデ
イスプレイに『MYTHOS-NITT』と表示され、回りに外の
映像が映し出された。

「……………お願いねノート……………」
ミオはグリップを引き、ノートを戦闘機からHEA形態へと変型さ
せた。

ノートはそのまま、攻撃された街へと向かった。

リンスはその光景を見て安堵した。

「はあああ、よかったあ、あの娘あんな無茶して〜」
溜め息を吐いていると携帯が鳴り響いた。

リンスは携帯を開き画面を覗くと相手はヘイトだと分かった。

（そろそろ来ると思った〜）

リンスは心の中でクスクス笑って電話に出た。

「もしも〜し、ヘイトさ〜ん・・・うん、今ミオちゃんが向かった
から・・・あはは、私が出たら街が消えちゃうよ〜・・・うん、分
かったよお〜じゃあねエ〜」

リンスは電話を切ってポケットに直す。

「よ〜し！いざいざはミオちゃんに任せて私は待ち合わせ場所にレ
ッツゴー!!!」

リンスは元気よく右手を上げて歩き出した。

街は最低限の被害に食い止められていた。

レンカのゲリがライフルを構えゲルに向かって放つ。直撃したゲルは破壊まではいかなかったが仰向けに倒れ機能を停止した。

「まったく、民間地区を襲うなんて」

レンカは次々来るゲルに向かってライフルを放つ。

だが数が多過ぎて全てを破壊出来なかった。何体か弾を交わしレンカに襲い掛かって来た。

「アツシュ任せたわよ？」

「ああ、分かった」

アツシュのゲリが剣を抜き迫って来たゲルを両断していった。

「くそ、数が多過ぎるぜ・・・流石に」

「泣き言なら後にする！」

レンカは後にライフルを放つ。

「分かってらあ！」

アツシュのゲリは後に剣を抜きゲルを切り伏せる。

「レンカ！アツシュ！待たせた！」

とその時リオウのゲリが合流した。

「数が多いが頑張れ二人とも」

リオウはゲルにライフルを放つ。

「レンカ、援護を頼む！敵陣に突っ込む！」

アツシュは剣を構え数十機のゲルの中に飛び込んだ。

「まったく、何時もそんな無茶して・・・でも今はそんな無茶も必要ね・・・」

レンカはスコープを覗きアツシュに攻撃を行おうとしているゲルを狙いライフルを放つ。

だが、如何せん数が多過ぎて全てを破壊出来なかった。だがそれをリオウがカバーしていった。

「どれだけいるのよ？」

レンカはスコープを覗き敵機をロックオンしていく。するといきなりビーツとコクピット内を響き渡らせた。

「なに？」

レンカのゲリは空から来る物体をディスプレイに表示させた。そしてそれを拡大しその姿を確認した。

「！！ッそんな・・・こんな時に！」

ディスプレイには黒いHEAの姿が映し出されていた。

「どうした！？レンカ」

リオウは迎撃しながらもレンカに問う。

「じよ、上空に浚に敵機を確認しました・・・先日現れた黒いミュトスです」

「なんだと！？」

リオウの言葉と同時に黒いミュトス、ノートは地面に着地した。

ノートの二つのカメラアイが紅く光る。

「く、こんな時に！！」

リオウはライフルを構え放とうとした時、ノートはリオウとは正反對の方向にライフルを構え放った。

ノートの放った数発の粒子はアツシユの回りにいたゲル達を破壊した。

「な！？」

アツシユは驚きノートの方を向いた。

ノートは浚にライフルを放ちゲル達を破壊していった。

「どういう事だ？仲間割れなのか」

リオウはノートの行動を見つめる。

「だがお陰で助かった・・・あれのお陰でなんとかなりそうだ」

ノートは肩部に装備されたサーベルを抜きゲルに切り掛かった。

「……………斬る……………」

ミオは小さく呟きゲルを切り捨てた。

そしてシールドに装備された粒子砲を放ち遠くにいるゲルも破壊した。

「……これで最後……」
ノートのシールドの先端部の粒子ソードがゲルを貫いた。ゲルはスパークを起こし爆発した。

「……………」

ミオはその光景を冷たく見つめる。

そして機体を戦闘機に変型させ離脱した。

「行っちゃったぜ？」

アッシュはリオウの横に着地し、呟く。

「どういうこと？」

レンカはライフルを下ろした。

「……とりあえず撤退だ……後は彼女がやってくれるだろう」
ススカ

(どうやら彼等は虐殺を望んでいないようだ……それだけでも収穫だな)

リオウ達は取りあえず街から離れ撤退した。

* * *

リンスは廃工場地帯に来ていた。

そこにはヘイトがブロックの壁にもたれ掛かっていた。

「ヘイトさ〜ん取りあえず街を襲ったゲルはミオちゃんが全て破壊したって〜。もうすぐ此処に来るから〜……あ！言ってる間にきたようだね〜」

黒い戦闘機は変型し、膝を折る感じに着地した。

コクピットハッチが開き中からゴシツクロリータで身を包んだミオが現れた。

ミオはコクピットから飛び降り着地し、リオウ達の所へ歩く。

「じゃあ、ミオちゃんも来たので会議を始めます。じゃあまず、どうしてゲルが此処に現れたのか、だね〜」

リンスはしゃがみ込む。

「・・・どうやらリベレイターは俺達の知らない何かがあるようだ」
ヘイトは腕を組みミオの顔を見つめる。

「……………」ミオはコクリツと頷き肯定する。

「しかも、それはゼニウスの連中・・・いや、世界中の人達が知っているようだ」

「リベレイターがまさか民間人を襲つてたなんて・・・私はてつきり軍を相手にしていると思つてたのに・・・だから私はH E A開発を手伝つてた・・・虐殺の為に造つたんじゃない」

リンスは何時ものノロケ気味の喋り方を止めていた。

「……………私も……………」

「取りあえず一旦セツカさんの所へ戻ろう。あの人なら何か知っている筈だ」

「うん、分かつたわ」

「……………うん……………」

そしてヘイト達は一旦セツカの所へ戻るのだった・・・

「それより、ミオお前どうしたんだ？その格好・・・」

「……………リンスが勝手に決めた……………」

「どっどっどっ？可愛いでしょう？」

「・・・あ、ああ」

「.....」

「まるで御人形さんだよぉ〜〜〜！」

何時もの調子に戻っているリンスだった・・・

M - 5 : 『 …… 過ちは正さなければ …… 』

- ユーラシア大陸中東部 -

「……………」

ノートは発砲を行っているゲルを粒子ソードで切り伏せる。

「こんな事するなんて」

ヨルズは大型粒子砲を構えゲルに放つ。

ゲルは数機巻き込まれ爆発した。

「……虐殺者が」

ヘイムダルはサーベルを抜きゲルの腹部を突き刺し爆発させ、後に新たに装備されたシールド粒子ライフルを発砲し、射程内のゲルを破壊していった。

「…………… 行こう……………」

ミオは最後のゲルをサーベルで寸断にし、ヘイトに言う。

「……くっ」

ヘイトはゲルの残骸を見つめ奥歯を噛み締める。

「行きましょ。ヘイトさん」

リンスは機体をヘイムダルの横に移動させヘイトに言う。

「……ああ」

ヘイト達はこの中域を離脱した。

ヘイト達は今、リベレイターのHEAの破壊を行っていた。だが、彼等はゼニウスとも闘っていた。

* * *

4日前

「そんなリベレイターが!？」

セツカはヘイト達の報告を聞いて驚きを隠せなかった。

「本当なのか？それは・・・」

ウィンロッドはリンスを見る。

「ええ、本当です。叔父様・・・」

リンスは目を反らし小さく答える。

「だが、リベレイターは今まで軍関連の施設だけを破壊していた筈だ・・・なんで今になって」

ジンは腕を組み壁にもたれかける。

「……………多分、私達のせい……………」

ミオはパソコンのキーボードを叩きディスプレイにある映像を映し出す。

「これは・・・」

ジンは腕を組むのをやめ映像を見つめた。それは今まで自分達が破壊してきた施設に赤いマークが付いた世界地図だった。

「恐らく、俺達が奴らの仕事をしていたので奴らはその分余裕が出来て本来の目的の人類抹殺を開始したのだろう・・・」

「・・・ッ!!」

セツカは口に手を宛てる。そして、よろめく身体をジンに支えて貰う。

ミオは後にキーボードを叩くと今度は黒い点が数十個現れた。

「……………攻撃された街……………」

ミオは小さく呟く。

「おいおい・・・こりゃあかなりの数になるぞ」

ウィンロッドは映像を食い入るように見る。

「こんな事を何時までも続けさせてはいけません」

リンスはウィンロッドの目を見つめる。

「・・・ああ、そうだな」ウィンロッドはそれに肯定する。

「だから、俺達はこれからリベレイターを攻撃対象にしようと思う・・・」

ヘイトはセツカを見る。

セツカは黙ったまま俯いている。

「これは俺達の提案だ・・・決めるのはあんだだセツカさん」

「だがヘイト？それじゃあゼニウスと共闘するということか？」

ジンはセツカを支えながら問う。

「……私達はリベレイター……」

ミオは映像を消し呟く。

「私達は私達のやり方で世界を変えます」

「目的は変わらない・・・標的にリベレイターが加わっただけだ」

「“だけ”で、オイ・・・相手は大組織なんだぞ！？そんなこと出

来るわけが・・・」

ジンは呆れたように言う。だがヘイトは

「出来る・・・ミュトスならやれる俺はそう信じている」

「ハハハッ！！気に入ったぜボウズ！その船に俺は乗ったあ！！」

ウィンロッドは高笑いし、ヘイトの背中を数回叩いた。

「オイ！？オツサン・・・」

「誰かが必ずしなければいけない・・・それをこの子達がやろうと

いうんだ・・・大の大人が手を貸さずにはいられんだろう？そうだと

？セツカちゃん」

ウィンロッドはセツカの肩に手をのせる。

「・・・そうですねウィンさん・・・過ちは正さなければいけません

んもね」

セツカはゆつくりと顔を上げウィンロッドに微笑む。

ウィンロッドも、ニツと笑い返した。

「セツカ・・・」

ジンはセツカの言葉に驚くが彼女が何時もの状態に戻っているのに

安心した。

（まったく、相変わらず無茶な事が好きだな・・・元夫して、ヒヤ

ヒヤするぜ）

ジンは呆れながらもセツカの事は心配した。

「それでは、私達は今をもって反リベレイターとして、活動を開始します。目的はリベレイター及びゼニウスの掃討!」

これは茨の道なのかもしれない・・・だがヘイト達はその道突き進む事を選んだ。哀しみの世界を創らない為に・・・

「まずはユーラシア大陸からリベレイターを排除しよう・・・あそこは広い性が被害が酷い」

ジンは操縦桿を握る。

「そうね。ヘイト達はH E Aデッキで待機してて・・・着いたら直ぐに戦闘だから」

「・・・了解」

「はい」

「……………ん……………」

ヘイト達はブリッジを後にした。

「じゃあ、俺も行くか・・・ヘイムダルの新装備の調整をやらなきゃならんし・・・」

ウインロッドはヘイト達の後に続くようにブリッジを後にした。

「ふう・・・」

セツカは溜め息を吐きながらシートに座り込んだ。

「どうした・・・これからだつてのに」

ジンは振り向き苦笑する。

「大変な事になったんだなと思うとプレッシャーが・・・」

「バシツとしろよ?何時ものように艦長さん(笑)」

「もう!ホントは思つてないのにそんな風に呼ばないでよ!」

セツカは頬を膨らませ不機嫌面になる。

「・・・その歳でそんな面してもあんまり意味がないぞ?」

ジンは笑いを堪えながらセツカの顔を見る。

「ムキー!!!!年増つて言うなあ!!!まだまだ現役よ!!!そんな事より早く艦を発進させなさい!」

セツカは両腕を振り回し叫ぶ。

「はいはい」と

(まったく、子供か？お前は・・・いい年して・・・それに俺は年増とか一言も言っていないぞ？)
少し呆れながらジンは操縦桿を握り直し艦『ヴォルヴァ』を発進させた。

銀色の戦艦は浮上し、目的地ユーラシア大陸へと向かった。

機体説明

(戦艦)

『ヴォルヴァ』

(:en:Vilva)

全長 ????

総重量 ????

ジェネレーター出力

9000000kw

スラスタ―総推力

85000000kg

センサー有効半径

9000m

武装

近接防御用粒子砲×26

高粒子収束砲×2

粒子圧縮ミサイル×20

説明

リベレーターが開発したミュトス支援専用艦となっている。

装備はミュトスのそれと同じ粒子兵器をメインとなっている。粒子圧縮ミサイルは中に高濃度の粒子が圧縮されており外部からの刺激が加わると爆発するという仕組みとなっている。

ミュトスの支援用というように格納庫にはミュトスの予備パーツや、追加兵装が格納されている。

元々は宇宙専用となっていて地上での活動も可能である。地上ではホバーリングでの移動が可能となっている。

カタパルトデッキにはミュトスだけではなく他のH E Aを格納するスペースがある。だが今はヘイムダル、ヨルズ、ノートしか格納されていない。

カタパルトデッキには自動整備ロボットが数機完備されている。人手不足のこの艦には無くてはならないものなのだ。このロボットがあれば自動で機体の整備を行ってくれる。

尚、今現在の搭乗員は艦長のセツカを始め舵員のジン、整備長、機体開発担当のウィンロッド。後、未登場だが医師のアンという女性とリンスが抜けたので新たにオペレーターとして元整備班のユウキという少女がいる。

明らかな人手不足が目立つがこの人数で半リベレイターとして活動していく事になる。

因みに艦の名称『ヴォルヴァ』とは北欧神話で『巫女』という意味である。

登場人物紹介

ウィンロッド・シャルマー

身長 176センチ

年齢 40歳

髪の色 ブラック

リベレイターの機体開発を担当していた男。

彼はリンスの叔父にあたる人物である。

普段は発進されていないミュトスを大切に整備をしている。それが彼の唯一の趣味らしい。

元々工学を得意としていた彼はリベレイターの黒髪の青年にスカウトされ、自分の技術が何処まで通じるかを知りたかった彼はそれにこたえリベレイターに参加した。（その後、姪のリンスと出会った）そして彼はリベレイターの技術、自分の技術を合わせミュトスを開発した。（リベレイターはユグドラシル鉱石のエネルギー発生技術とミュトスの設計図をウィンロッドに提供しウィンロッドは独自でそれを改良した）

だが後にヘイト達の情報によりリベレイターを脱退して反リベレイターとして参加していく。

ジン・カルス

身長 185センチ

年齢 27歳

髪の色 ブラック

ヴォルヴァの舵員をしている右頬に傷を持つ青年。元セツカの夫である。だがこのことは誰も知らない事である。過去に子供を亡くしたショックを受けていたセツカを今まで支えて来た。

彼の傷は子供を亡くした時に出来た傷である。

セツカが何故彼と別れたかは不明。

別れていても彼は今でもセツカの力になろうとしている。（だからリベレイターに参加している。）

後にリベレイターを抜けセツカと共に反リベレイターとなる。

スズカ・ミヤノ（鈴華・宮野）

身長 158センチ

年齢 16歳

髪の色 ブラック

ゼニウスH.E.Aを開発している会社『フューチャー』の最高責任者。弱冠16歳でその地に上り詰めた少女。

元々は彼女の父が立ち上げた会社だが彼女の父は生れつき心臓を病んでいて何時亡くなるか分からなかった。だから彼女の父は彼女に自分が死ぬ前に自分の全ての知識、技術を彼女に与えた。

アキラ、リオウとは昔からの幼なじみであり彼女は彼らの中心にいた。

だが、リベレイターの起こしたテロによりアキラを亡くし（この時はまだ彼が生きているとは知らなかった。）リオウはそれがきっかけでゼニウスに参加した。そんな彼を裏から支えたのがスズカだった。

そして今、彼女は彼女が出来る事を捜しそれを行っていた・・・余談だが、彼女には一人の歳の離れた行方不明の兄が存在する。

M - 6 : 『……私の居場所』

10年前……

「ちつ……リベレイターめ、もう嗅ぎ付けて来たか」

眼鏡を掛けた男性はパソコンを操作しながら舌打ちする。

「……あなた」

ブロンドの髪を一つに束ねた女性はその男の傍にもたれ掛かる。

「もう時間がない！私は“これ”をミヤノに送る。お前はアキラを・

……」

男はパソコンのキーボードを叩き女性に言う。

女性は頷き部屋を出た。

「このデータをどうしてもあいつに……」

キーボードを叩いていると外から爆発音が響き渡った。

「くそ……」

男は外を気にせずキーボードを叩く。

そして、爆音は近づき屋敷の壁が破壊された。

壁の瓦礫は男の上に降った。

「ぐあっ」

男は瓦礫に埋もれた。

眼鏡のレンズは割れ頭からは紅い血が額を伝い流れていた。

「……くっ」

男は最期の力を振り絞り絞りキーボードを数回叩いた。

画面には『送信完了』という文字が映し出されていた。

男はそれを見てフツと笑い臉を閉じた……

女性は少年を抱え走った。

少年は女性にしがみつく。

「大丈夫よ・・・大丈夫だから」
女性は少年のブラウンの髪を優しく撫でる。

「アキラ・・・」
女性は少年を抱え地下室のシエルターに向かった。

リベレイターのH E Aはそれを見逃さず地下に向かう女性を追った。
女性は走り地下に着きシエルターの扉を開けた。

だが、その時追って来たH E Aの槍が女性に向かって投げられた。
女性は少年を投げ入れ扉を閉めた。

「母さん・・・」

少年が扉の隙間から見たのは黒い槍の朱く染まった尖端だった。
それは少年の身体を貫いていた・・・

そして、その後ろには槍を投げた漆黒のH E Aの姿が有った・・・
それは朱い眼を光らし少年を見ているようだった・・・
扉は閉まるが少年は扉を叩いた。

「母さん！母さん！！」

少年は扉を叩き続ける。

シエルターは地下へと降りていく。

「うああああああああああああ・・・！！！！！！」
少年の叫び声がシエルターの中を響き渡らせた・・・

「……………イト……………」

誰かの声が聞こえる。

「……………イト……………起……………」

少女の声だろうか？

イトは眼を開ける。そこにはミオの顔があった。

「・・・どうした？」

イトはミオに問い掛け身体を起こす。

「……………うなされてた……………」

ミオは立ち上がりコップを持ちそれに水を容れヘイトに渡した。

「・・・そうか」

ヘイトはコップを受け取りそれを飲む。

「……………大丈夫……………?」

ミオは小首を傾げる。

「・・・ああ」

ヘイトはコップを円テーブルに置きベットに座る。

「……………ん……………」

ミオはヘイトのベットのの中に潜り、瞼を閉じた。

そして、スウスウという吐息を立て眠った。

「・・・子供だな」

ヘイトはミオの銀髪の前髪を撫で呟く。

「・・・そういえばもうミオと会ってから結構経つんだな・・・」

ヘイトは天井を見つめ、ミオとの出会いを思い出す・・・

* * *

5年前・・・

俺がヘイムダルのパイロットに決まったときだった。

俺に任務が与えられた。それは『生体兵器』の破壊の任務だった。

セツカさんは

「人のすることではない事を行っている奴らだ」

と言っていた。

俺には何の事だか分からなかったが地球に降りて活動を開始した。

援軍にゲルが数機いたが建物破壊ではなくデータの破壊なのであま

り意味がなかった。

俺は建物に侵入し、目的のデータバンクに向かった。

中の構造はリンスの情報のお陰で迷う事はなかった。

時々、白衣を着た男性が通り掛かったが俺は背後に回り込みその男の後頭部を銃で撲り気絶させ、使われていなさそうな部屋にそいつ

を押し込んだ。

そして、目的地につくと俺はリンスの情報通りに扉のパスワードを押ししていく。

6桁の数字を俺は迷わず押ししていった。

そして、ピピツと音を立てて扉は開いた。

「・・・リンスの情報は本当に外さないな」

俺はリンスの情報に感謝しながらそこにあった、一台のパソコンに一枚のディスクを入れた。ウイルスだ。

作業は数分で終わった。

そして、部屋を出ようとした時・・・パンツという音が聞こえた。

それと同時に俺の左肩に痛みが走った。左肩は朱く滲み血が零れ落ちていた。

(どういう事だ？何で俺が此処にいると分かったんだ？)

俺は壁に隠れながら銃を構え、覗きこむが人の影が無かった・・・

(何処だ・・・)

膠着時間が続く。

(くっ、こつちには時間が無い・・・後少してHEAによる外からの攻撃が開始される)

俺は時間を考え壁から出て走った。そしてそれと同時にまた銃声が聞こえた。

俺はそれを気にせず走った。弾は俺の足、肩を掠める。俺は振り向き銃で牽制する。だが、それを躊躇ってしまった・・・

それは・・・そこにいたのはまだ幼い小さな少女だったからだ。

(な、何でこんな所に子供が？まさか、俺と同じで少年兵士なのかな？)

俺は適当な部屋に入り身を隠した。少女の射撃が正確に俺に当たっていたからだ。身体中に痛みがはしる。俺は通信機でウィンロッドに通信を入れた。

『どうした？ボウズ』

「ハア、ハア、ヘイムダルを出撃させてくれ・・・ポイントは05

地点だ」

『なっ？ヘイムダルはまだ・・・』

「頼んだぞ・・・」

俺は通信を切った。

そして立ち上がり部屋の明かりを付けた。

「！？なっ」

俺は回りの光景に驚いた。

セツカさんの『人のすることではない』という意味が此処で理解した。

そこは、カプセルの中に少年、少女がズラッと入っていた。

「・・・人体実験か・・・なら俺を襲って来たあの少女もまさか・・・」

俺は傷を止血しながら呟いた。

と、その時建物全体が揺れた。

「・・・始まったか」

どうやら外にいるゲル達の攻撃が開始されたようだ。ゲルには人は乗っておらず予めその時間に攻撃するようインプットされていた。

俺はそれを窓から覗きその光景を眺めた。

すると1機のゲリがゲルに攻撃を仕掛けて来た。

黒いゲリだった。黒いゲリは日本刀を奮いゲルを一刀両断する。

そして、次の敵へと向かいバーニアを蒸し接近した。

「・・・あの反応。恐らく此処の奴らの完成体といったところか・・・」

「」

黒いゲリは次々に日本刀でゲルを切り伏せていく。

「まずいな・・・ゲルが全滅する」

と、その時1機のゲルが俺の要る部屋の壁を突き破って来た。

「・・・来たか」

ゲルは自動にコクピットハッチが開いた。

俺は迷わずそれに乗りに込んだ。

シートに座りハッチを閉める。

そして、ディスプレイに掌を当てた。するとディスプレイに『M Y T H O S - H E I M D A L L』と映し出され回りに外の景色が映し出された。

それと同時にウィンロッドから通信が入って来た。

『ボウズ！お前の言われた通りにヘイムダルは送ったがまだフレームしか完成出来なかった・・・だから緊急にゲルの装甲を付けた。だが、性能はヘイムダルのそのままだ』

「・・・了解」

俺は通信を切りゲル装甲のヘイムダルを建物から抜き出した。

そして標的の黒いゲリの方を向かせる。

黒いゲリは調度最後のゲルを両断していた。

「ちっ、遅かったか」

俺は舌打ちしライフルを構えた。

向こうもそれに気付いたのか俺のほうを向いた。

俺はライフルを放った。

光りの粒子はゲリに向かっていく。

だが、ゲリはそれをステップさせ、回避させバーニアを使い俺に近づいて来た。

「まずい・・・奴の射程内に・・・」

「……………死ぬ……………」

ゲリは日本刀を振り下ろす。

俺は咄嗟にサーベルを抜きそれを受け止めた。

ジジ・・・という音が鳴りながら鏝ぜり合っ。

「・・・何だあの剣は！？粒子で焼き切れない？」

恐らく金属で出来ていると思われる剣は粒子の熱で溶かされず形を保っていた。

「……………リベレイター、敵……………」

ゲリはサーベルを弾き返しその隙を付きヘイムダルの腹部を蹴り飛ばした。

「……………くっ」

俺は体制を立て直そうとしたがゲリはその時間を与えず後に追撃を加えようとしていた。

「・・・チッ」

俺は持っていたライフルをゲリに向けて投げた。

ゲリはそれを斬りライフルは爆発した。

「……………!?!」

俺はその隙を付きサーベルを後に抜きゲリに振り下ろした。

「……………ぐっ」

ゲリは日本刀でそれを受け止める。

(まったく、なんて反応を持っているんだ・・・普通の人間なら斬られてるぞ・・・)

俺はその反応速度に感服しながらも力を緩めずサーベルを振り下ろす。

サーベルは2本共日本刀の一点に集中させたのが良かったのか日本刀は熱に耐え切れず折れた。

そして勢いは削がれたもののそのままゲリを斬った。

「……………うっ」

ゲリはコクピット回りをスパークさせながら地面に激突した。

そしてカメラアイの光りも機能を停止させたのかその光りは失った。

俺は倒れたゲリの斬られて隙間が出来た所をアップさせて覗いた。

「あれは・・・」

そこに座って気を失っていたパイロットは俺を撃った少女だった。

「・・・」

俺はそのゲリを抱えてこの地を離れた。

* * *

俺は少女を持ち帰り宇宙へと帰り艦『ヴォルヴァ』の医務室にいた。

少女は頭を打つたらしく額から血が出ていたので医師のアンさんに手当をしてもらった。

「まったく、有り得ないわよ？敵兵を連れてくるなんて・・・まあ、いいけどさ」

アンさんは呆れながら言った。

「じゃあ私はセツカに報告しに行くから後は頼んだわ」

そう言つてアンさんは部屋を出ていつてしまった。

アンさんが出て行き少しすると少女は目を覚ました。

「……………」

少女は頭を押さえゆつくりと身体を起こした。

「・・・目が覚めたか」

俺は椅子に座り少女を見る。

「……………死んでない……………？」

それは誰に言っているのかは分からなかったが俺は

「お前は死んでない」

と、答えた。

すると少女は

「……………なんで……………？」

と、聞き返した。

「さあな」

「……………死にたい…今…辛いから…」

少女は単語を一つずつ呟く。それも消えてしまいそうな声で。

「じゃあ、その命がいららないのなら俺の為に使え」

俺は彼女の力が必要だと感じた。彼女は俺に必要なのもかもしれないと。

「……………敵…なのに……………？」

少女は首を傾げ呟く。

「・・・お前は俺に似ているんだ」

「……………似ている……………？」

少女は後に首を傾げる。

「俺もお前も一人だ。そして自分の要るべき場所を知らず今を生きている・・・」

「……居場所……私にも……無い……」
少女は少し俯いた。

「だから、無い者同士一緒に捜さないか？」

もしかすると俺はこの少女の事を好きになってしまったのかも知れない。最初に会った銀色の髪が幻想的で可憐な少女に。

「……名前……」

少女は俺の顔を見つめ聞く。

「ヘイトだ。ヘイト・ディスター」

「……私……ミオ(30号)……」

「よろしくな」

俺はミオに握手を求める。

ミオは戸惑いながらも手を握り返してくれた。彼女の華奢な手からは温かい熱を持っていた。

(……私の居場所……見つける……必ず……)

ミオの生きる理由が出来た。

そして、俺には初めて守りたいモノが出来た・・・
戦場での闘いの中で俺とミオは出会った・・・

機体説明

(特殊兵装機体)

ゲリ・MURAMASA

型式番号 LGX-00

頭頂高 17.0m

本体重量 5.8t

全備重量 6.0t

ジェネレーター出力

1000kW

スラスタ―総推力

30000kg

センサー有効半径

3000m

武装

MURAMASA x 1

説明

超近接戦専用として開発されたHEA。武装がMURAMASAという刀一本という心持はないがこの刀は粒子兵器に耐え切れる強度を持つ。

強度も十分、敵機を切り裂く刃を持っている。従来では叩き潰す事しか出来なかった実体剣だがこの刀は装甲を切り裂く力がある。

機体の性能は従来のゲリと、殆ど変わらない。だが機体重量が減ったおかげか回避能力は向上している。

機体のカラーはブラック。(おそらくミオのパーソナルカラーだと思われる)

まだまだ謎の多い機体で機体ナンバーでは『LIBERATOR』、『GENIUS』の二つの型式番号を持っている。

M - 7 : 『 …… あれは 』

- 宇宙 -

そこに漆黒の槍を持ち、そしてその槍と、同一のカラーリングが施されたH E Aが1機格納庫のような場所にいた。

そしてそのコクピットハッチの前には紺色のパイロットスーツを着たダークブルーの長髪の男がヘルメットを片手に持ち立っていた。

男はそのH E Aを見つめ黒い笑みを浮かべコクピットに入った。

ハッチは閉まりH E Aのカメラアイが紅く光りが灯った。

そして、そのH E Aはバーニアを点火させ漆黒の宇宙へと飛び立った……

それは漆黒の槍を持つミュトスだった……

- 地上アフリカ大陸砂漠地帯 -

ヘイト達は今この地で身を隠していた。

「ふうー、ヘイトめヘイムダルを雑に扱いやがって……こっちが整備する身にもなれってもんだ」

ウィンロッドは文句を吐きヘイムダルの関節部の調整を行っていた。ヨルズと、ノートは整備が終わったらしくデッキに固定されていた。

「……………」

食堂に銀髪の少女、ミオの姿があった。ミオは両手でマグカップを包み中に容れられているココアを虚ろな瞳で見つめていた。

その姿をリンスは見つけミオに後ろから抱きしめた。

「ミ〜オちゃん」

リンスは自分の頬をミオに擦り付けた。

「…………… リンス……………」

ミオはマグカップから手を離しリンスの腕を掴んだ。

「およ？どうしたの？」

リンスは頭に？を浮かばせミオの顔を覗き込む。

「……………ヘイト…変……………」

ミオはリンスの腕に顔を埋め呟く。

リンスは優しく微笑みミオを向かい合わせ再度抱きしめた。

「大丈夫……みんな色々な事が在って気持ちの整理が出来てい
ただけだから……ミオちゃん心配しなくて良いよ」

リンスは優しくミオの背中を摩った。

ミオは顔を上げリンスの瞳を見つめた。

「……………リンスも…辛い?……………」

そのミオの言葉にリンスは表情を曇らせる。だがすぐにそれは消え
笑顔が戻った。

「ふふ……そうかな?私も色々在ったからかな?」

「……………話し…聞くよ?……………」

ミオは腕をリンスの背中に持つて行った。そして抱きしめた。

「……………うん」

リンスの瞳からは涙が零れていた……

ブリッジにはセツカ、ジン、ユウキがいた。

「これで一端は此処も落ち着きますね?」

ユウキはキーボードを叩きながら言った。

「ああ、そうだな……だがリベレイターが存在している限りまた、
やってくるだろう」

ジンは外の映像を見つめる。周りは全て砂漠の映像が映し出されて
いた。

「……………どうした、セツカ?」

ジンは俯き考え込むセツカの様子に気付き問う。

セツカはジンの声に反応し顔を上げる。

「いえ、……………どうしてリベレイターはこんなことを……………って思
っていただけよ」

「確かに、リベレイターの目的とは一体何なんでしょう?」

ユウキも不思議がりながらセツカの言葉に同意する。

「世界の破壊・・・とかかもな」
ジンは腕を組み苦笑しながら答えた・・・その時、ヴォルヴァのセンサーに何か引掛かった。ブリッジ全体に警戒音が鳴り響いた。ユウキは画面を見つめキーボードを叩く。
「十時の方角にゼニウスと思われるH E Aを数十機確認しました！」
「ちっ・・・見つかつたか」
ジンは急ぎ操縦桿を握った。
「仕方ないわ・・・ユウキ、ミュトスの発進を！」
「了解！」
ユウキは戦闘準備を報せ、パイロット達をデッキに向かうように命令する。

部屋全体に警戒音が鳴り響いた。
明かりを点けず暗い部屋のベットにヘイトは座っていた。
「・・・敵か？」
ヘイトはゆっくりと、立ち上がる。
最近ヘイトは夢で過去の出来事を見ていた。親が黒いH E Aに殺される夢だ。
(なんで、いきなりあの出来事が夢で・・・)
ヘイトは忘れるように首を振る。そしてドアを開けデッキへと走った。

H E Aデッキにはすでにミオとリンスがミュトスに乗り込んでいた。
「・・・リンス・・・さっきの話し・・・本当・・・？」
ミオは手前に位置するディスプレイを指で弾き聞く。
「・・・まだ確証は無いけどね？でも、可能性があるの・・・もし“あれ”が完成しているなら世界は・・・」
リンスはキーボードを弾きながら答えた。ディスプレイには『MY THOS-YOLZ』と、映し出された。

「ヨルズ、右舷カタパルトデッキに搬送します！ノートは左舷カタパルトデッキへ！」

ユウキの声と同時にヨルズは右舷カタパルトデッキへ、ノートは左舷カタパルトデッキへと移動された。

「ヨルズ。カタパルト接続を確認しました！システムオールグリーンです。ハッチ開放・・・発進タイミングをヨルズに転送します」
ヨルズはカタパルトにレッグが固定される。

（もし・・・あれが・・・いえ、今は戦闘に集中しなきゃ・・・）
リンスはディスプレイを見つめ発進タイミングを確認する。前方のハッチが開いていく。

「ヨルズ・・・敵を粉碎してきます！」

カタパルトはスライドし、ヨルズはスピードを上げ出撃した。

「続いてノートの発進準備を開始します！」

ノートもカタパルトデッキに搬送され、カタパルトにレッグが固定された。

「・・・システムオールグリーン……………」

ミオはディスプレイを見つめ異常が無いか確認する。

「ノートシステムオールグリーン、カタパルトコントロールをノートに転送します」

「……………了解……………」

ノートの前方のハッチが開く。

「……………ノート…行くよ……………」

カタパルトはスライドし、ノートは外へと出た。

そしてすぐに戦闘機に変形させ、ヨルズを追った。

「ヘイト遅いぞ！」

ウィンロッドはヘイトをコクピットに誘導する。

「済まない・・・ミオ達は？」

「もう出撃^でした。後はお前だけだ！」

ウィンロッドはコクピットから離れる。それと同時にヘイムダルの

コクピットハッチが閉まる。

『オイ！ヘイト。また、無茶苦茶な操縦をするなよ！？後が（俺が）大変なんだからな！！』

ウィンロッドは外からヘイトに通信をいれ注意した。

「・・・努力はする」

『うおい！？ヘイ・・・』

ヘイトはウィンロッドからの通信を躊躇しないで切った。

『ヘイムダル右舷カタパルトデッキに移行します』

ヘイムダルは右舷に向かいカタパルトがスライドした。

『カタパルト固定。ハッチを開放します。』

ユウキはスムーズに作業を済ましていく。ヘイムダルの前方のハッチが開いていく。

『・・・システムオールグリーンです。コントロールをヘイムダルに移します。ヘイムダル発進どうぞ』

ヘイトはグリップをにぎりしめる。

「了解・・・ヘイト・ディスター！ヘイムダル・・・出る」

ヘイトはグリップを前にスライドさせる。カタパルトはスピードを上げ開いたハッチに向かってスライドした。

その勢いを殺さずヘイムダルは発進した。

「・・・戦闘はもう始まっているのか？」

ヘイムダルの前方には粒子、爆発の光が数多く光っていた。

「今度こそ首を戴くぜ！バケモン！」

アッシュの朱いゲリは剣を抜き空中にいるヨルズに向かって地面を蹴りジャンプした。

「誰がバケモンよ！？バケモンはないよ〜！？」

リンスは頬を膨らませ向かってくる朱いゲリに向かって両マニピュレータで持っている二丁の粒子ライフルを放った。

「そんなモン当たるかよ！！」

朱いゲリは右側の全てのバーニアを点火させ、それをかわした。だが、その後ろにいた4機のゲリは交わしきれずその粒子に飲み込まれ爆発した。

「ちっ！どうやら俺は隊長なんて柄じゃねえってか？だが、間合いは貰ったぜバケモン！！」

朱いゲリはその剣でヨルズの左の粒子ライフルを叩き潰した。粒子ライフルは爆発した。

「アアアアア！！もう許さないんだから！」

ヨルズは手首部に隠された粒子サーベルを抜き、ゲリの剣を一刀両断した。

「クツ！まさか剣まで装備されていたのか・・・」

アッシュは脚部のバーニアを点火させ、着地する。

だが、すぐに新たな剣を抜き向かって来るヨルズのサーベルをその剣で受け止めた。

「なっ！？」

ヨルズのサーベルの刃がゲリの刃と反発した。

「アンチビームコーティングこれなら！」

ゲリは脚部に装備されたダガーを抜きヨルズのコクピット部分を狙う。

「くっ、粒子フィールド展開・・・」

ヨルズの回りに球体状のマカライトの輝きを持つ粒子が覆う。

だが、

「やっぱり、その刃も・・・」

ゲリの刃はヨルズのフィールドを貫通した。

「・・・グッ！」

リンスは咄嗟に右のマニピュレータに装備された粒子ライフルでそれを防いだ。

ダガーはライフルに突き刺さり爆発する。

その爆発は2機のHEAを包み込んだ。

ノートは戦闘機の形態のまま、ゲリ達の射撃を避ける。

そして旋回し、右翼のライフルを放ちゲリを1機破壊する。

だが、オレンジカラーのゲリからの弾丸がノートに襲う。

「……………！」

ミオはそれをノートを変形させ、シールドで受け止めた。

「やっぱり防ぎますか」

レンカはライフルをさらに放った。

「……………！」

ノートはその射撃により動けずにいた。

そして左右からゲリが近づき剣をノートに振り下ろした。

「……………ッ！……………」

ノートはライフルを捨て腰部に装備されたサーベルを抜きそれを右のゲリのコクピットを狙って投げ突き刺した。

そしてさらにサーベルを抜き左のゲリのコクピットを貫いた。

2機のゲリはスパークし、爆発した。

「なっ！？」

ノートはそのまま接近し、サーベルでレンカのゲリのレフトアーマを切り落とし胸部を蹴った。

「きゃあー！」

ゲリは吹っ飛び、砂の上に落ちた。

そしてその機能は停止した。

「……………！」

ミオはそれを見届けサーベルを直す。

「……………！」

突然ノートに向かって上空から粒子兵器が襲いかかった。

「……………粒子兵器！？……………」

ミオはそれをシールドで防いだ。

上空をみると漆黒の槍を持つミュトスがそこにいた・・・

「アキラー!!」

リオウは叫びヘイムダルに粒子サーベルで切り掛かる。

「・・・リオウ!」

ヘイトもサーベルを抜きそれと鏝ぜり合う。

粒子と粒子がぶつかり合い反発エネルギーが生まれる。

「どうしてお前は戦っている!? お前だってリベレイターの行いを
見た筈だ!! なのにどうしてお前は俺達と戦い続ける!?!」

「俺は・・・俺達は奴らとは関係ない・・・これは俺達の戦いだ!」

ヘイトはサーベルを弾きそしてバイオレットカラーのゲリの腹部を
蹴り飛ばした。

「そんなエゴが通じるとでも思っているのか?」

ゲリはバツクパツクのバーニアを点火させ、体制を立て直し空中に
停滞する。

「世界は誰かが変えなければなんにも変わらない! だから俺達はその
鍵となる!」

ヘイムダルはライフルを放つ。

それを脚部のバーニアを使いリオウは右に避ける。

そして実弾ライフルを構えヘイムダルに放つ。

「それなら他にも方法が有ったはずだ!? 戦い以外でだ!」

ヘイムダルはシールドを構えそれを防ぐ。

「戦いが・・・戦いそのものに意味が有るんだ!」

ヘイムダルはサーベルで切り掛かる。

「どうということだ!」

ゲリのライフルは切断され爆発する。

「それで人類は過ちに気付く・・・哀しみの世界をな!」

ヘイムダルはさらに追撃する。

「だが、お前が戦えば戦うほどその犠牲になっていく者達が増えて

いく！」

リオウは再度サーベルを抜き鏢ぜり合う。

「そしてお前のような存在が増えていく！」

ゲリとヘイムダルは同時に離れゲリは機関砲で牽制する。

「お前も気付いている筈だ！！」

リオウは叫ぶ。親友ともに。ヘイト・デイスターではなくアキラという少年に。

その言葉が届いたのかヘイムダルはその場に硬直した。

「これ以上哀しみを増やしてはいけないんだ！」

「だが、今止めれば今までの犠牲が全て無に帰る！」

ヘイムダルはサーベルをゲリに突き付ける。

「それでも過ちは正さなければならぬ！」

リオウは粒子の刃を突き付けられても微動だせずヘイムダルを見つめる。

「・・・お、俺は・・・僕は・・・」

ヘイトの手は震えた。そして、ディスプレイの先にいるHEAを見つめる。

だがその時ヘイムダルのコクピット中に警報音が響き渡った。

そしてその後上空から粒子兵器によると思われる攻撃がきた。

「なんだ！？」

ヘイムダルはシールドを構えそれを防ぐ。だがその後シールドに何かがぶつかりヘイムダルは地上に落ちた。

「アキラ！」

リオウはその後を追う。リオウからは、はっきりと見えた。粒子攻撃の後ヘイムダルのシールドに黒いHEAが粒子の刃を持つ槍で切り掛かりそのまま地上に落としたところを・・・

「・・・くっ」

ヘイトはヘイムダルの体制を立て直す。下が軟らかい砂地のお陰で機体のダメージは無かった。

「さつきから聞いてりゃ、“理想”、“犠牲”やら堅苦しい事を喋

つてんじゃねえよ!!」

「・・・誰だ？」

ヘイトはディスプレイの映像をアップにし、前方の機体を見る。
「戦場にはなそんな堅苦しいモンは存在しねえんだよ!」

そこには漆黒の槍を持つ漆黒のH E A、ミュトスがいた。

「あ、あれは・・・あいつは!」

ヘイトは過去の出来事がフラッシュバックする。

10年前自分の両親を殺したH E A。それが今日の前にいた。

「有るのは生か死・・・それだけだろが!」

漆黒のミュトスは槍の刃から粒子の刃を出す。そしてヘイムダルに切り掛かる。

「貴様は!」

ヘイトはサーベルを抜きそれと鏝ぜり合いを行う。

ジジジという粒子同士がぶつかり合う音が響き渡る。

「貴様の性で!!」

ヘイムダルはシールドの先端の粒子砲から刃を造り出し漆黒のミュトスに振り下ろす、が漆黒のミュトスは槍の反対の柄から同じ粒子の刃を造りサーベルの刃を跳ね退け反対の刃でそれを受け止めた。

「ハッ!なんかオレに恨みが有るらしいが生憎オレは他者に恨みは買いまくりなのよ! テメエがなんだかしらねえが命令なんでな? 消えてもらうぜ!」

漆黒のミュトスは体制を低く屈む。

「ゲンゲニル・・・」

槍は全体が孔雀石色のような光りが包み込み。先端の刃はさらに鋭く変わり一瞬でヘイムダルのレフトアーマーをえぐり取った。

「な、なに?」

ヘイトはその槍の突きが見えなかった。ヘイムダルのコクピットには常に警報音が鳴り響く。

「ケッ! 邪魔が入ったか」

漆黒のミュトスは背後を振り向く。そこにはリオウのゲリがいた。

「中々腕は立つようだな？あの突きの速度を予測し銃弾を放ちオレの機体の腕に命中させ、狙いを反らせるなんてな。それさえなければアレの心臓がえくれたんだがな・・・」

漆黒のミュトスはリオウに向かい槍を構える。

「くっ・・・」

リオウはサーベルを抜く。だがそのサーベルにはエネルギーが殆ど残っていないかった。

「機体のスペックが同じならチットはやり合えたんだがな？残念だ・・・」

漆黒のミュトスはリオウに切り掛かる。

バチツという粒子の音が響き渡る。

「ち、死に底ないが!!」

漆黒のミュトスの脇腹部分をヘイムダルのサーベルの刃が掠める。

「貴様にこれ以上奪われて堪るか!!」

「・・・アキラ」

リオウはその光景を見つめる。さっきまで自分と戦っていた相手が自分を守る為に戦っていたからだ。

(アキラ・・・お前は何も変わっていなかったのか・・・)

漆黒のミュトスはヘイムダルに突きを入れる。

だがそれをヘイムダルはかわしていく。

(・・・お前の易しさは)

「死にぞこないは死にぞこないらしくしてろってんだよ!!」

漆黒のミュトスの槍はまた、孔雀石色に輝き出す。

だがそれは上空から現れたライトアーマー、ウイングを失った、ミュトス・ノートによる粒子砲に寄り防がれる。

「テメエもか！失敗作がっ!!」

漆黒のミュトスはヘイムダルの横に降り立つノートを見つめる。

「…………お前は有っては成らない!…………お前のような存在は私が斬る!!!」

ノートのシールドに装備された粒子の刃は常時の約2倍ぐらいまで

伸びる。そしてそれを漆黒のミュトスに向かい切り掛かる。

「有っては成らないだあ？ふざけんな！！成らないのはテメエだろ
うがあ！！！」

ノートと、漆黒のミュトスは激しい鏝ぜり合いを続ける。何回も、
弾き返し何回も鏝ぜり合う。

「テメエみたいな人形とはオレア格が違うんだよ！」

漆黒のミュトスのレフトレッグ、爪先から現れた碧の光りを放つ粒
子の刃がノートのライトレッグを切断する。

「……………くっ……………」

「人形が人様に逆らうんじゃねえよ！！！」

ノートの頭部が槍に貫かれ爆発する。

そしてノートはその場に崩れ落ちる。

「ッ！！ミオ！！！」

ヘイトは叫ぶ。そしてバーニアをフルに使いノートの所に向かう。

「ったく……………面倒を掻かせやがって……………まあ、これで最期だな
あ、ゴミを残していたら環境に悪いからな。処分しなきゃな」

漆黒の槍がノートのバックパック部分に向かって構える。

「くっ……………間に合わない」

ヘイトはめい一杯バーニアを吹かす。

「じゃあな……………」

漆黒のミュトスは槍を振り下ろす。

「俺はもう失いたくないんだ！！！！！」

その時、ヘイムダルのディスプレイに『SYSTEM-RAGNAR
RK』という文字が浮かび上がった。そして同時にヘイムダルの動
力部に位置する胸部部分からユグドラシルの孔雀石の輝きが装甲の
隙間から漏れ出した。

「うあああああ……………！！！！！」

そのスピードは漆黒のミュトスのスピードを軽く凌駕していた。

ヘイトは漆黒のミュトスの頭部をライトマニピュレータでわしづか
みにし、そのまま投げ飛ばした。

「ぐあつ!? なにい」

漆黒のミュトスは槍を砂地に突き刺し体制を直す。

「はあああ……!!」

ヘイムダルはサーベルを抜きミュトスに切り掛かる。

サーベルの刃の光りは紅く輝いていた。

「何なんだ!? 一体!!」

ミュトスは槍を構え粒子の刃で受け止める。

だが漆黒の槍はヘイムダルの粒子の刃に耐え切れず熔解し、ライトアーム事切断された。

「チツ! 聞いてないぜ!? あんな機能をよッ!!」

ミュトスは切断されたライトアームを庇いバーニアを点火させ撤退する。

「逃がすか!!」

ヘイムダルはそれを追おとしたが……

『ERROR』と、ディスプレイに表示され動きを停止した。

「くそ……」

ヘイムダルからはもう孔雀石色の輝きは失っていた……

機体解説

【リベレイター】

(ミュトスタイプ)

『ミュトス・オーデイン』

(MYTHOS・ODEN)

型式番号 RM-L0

頭頂高 18.0m

本体重量 6.0t

全備重量 7.5t

ジェネレーター出力

24000kW

スラスタ―総推力

60000kg

センサー有効半径

8000m

武装

高粒子槍『グングニル』×1

粒子刃×4

粒子マニピュレータ砲×2

(説明)

新たに現れたミュトス。リベレイターが管理している。

機体のメインカラーのブラックはミュトス・ノートと重なるが漆黒の槍が目立つ機体。

10年前にも現れておりヘイト・ディスター(アキラ)の両親を殺害した張本人。機体性能は従来のHEA(ミュトスも含む)を越えておりヘイムダル達のユグドラシル鉱石とはまた違いそれを越える“ユグドラシルの原石”が使われている。これはユグドラシル鉱石とは違い全く不純物が入っていないくエネルギー生産率が向上している。だがその分数が少なく貴重な物質となっている。

オーデインには特徴とも言える槍グングニルは両方の柄から粒子の刃を出現させる事が可能である。

粒子の出力は高くこれのエネルギーを完全開放しての突きは粒子による残像が現れ敵の視覚を麻痺させ突きを命中させる。

あと、爪先部、甲部には粒子の刃を発生させる事が可能。これにより格闘戦はさらに有利となった。

さらに両マニピュレータに装備された粒子砲は射程も長く威力も高く造られている。

少し近接戦寄りに見えるが機体のバランスはよく機動力も高く回避能力、耐久力も他のミュトスより向上している。機体の名前はその

槍で分かるように『主神・オーディン』からきている。
北欧神話で有名な『戦争・死を象徴した神』である。

砂漠……ノートは粒子をシールドで防ぎ空を見つめる。

『 …… あれは …… 』

ミオはそこにいる漆黒のミュトスを見る。

『 …… …… 』

ミオはサーベルを抜き構えた。

漆黒のミュトスは槍から孔雀石のような色の粒子の刃を出しノートに切り掛かった。

『 …… …… つつ …… …… 』

ミオは咄嗟に機体を左にずらしそれを避ける。

だがノートのライトアームはその刃に貫かれ爆発した。

『 ゲングニルを避けるとはなあ。てめえが噂の …… 』

男の声がノートのコクピット内に響く。

『 …… 噂? …… …… 』

ミオはシールドから粒子の刃を出し切り掛かる。

だがそれは空を斬った。

『 命令にはねえがまあいいだろ …… 』

ミュトスはマニピュレータから粒子を出しノートに放つ。

『 …… …… …… 』

ミオはそれを避けるが ……

『 あめえよ!! 』

ミュトスは爪先から粒子の刃を出しノートの腹部を切り裂いた。

『 …… …… …… …… 』

ノートはバランスを崩し砂の上へと落ちた。

『 終わりだなあ!! 』

ミュトスは槍を構える。

だが背後からの攻撃がミュトスのバックパックに命中しミュトスは怯んだ。

「誰だ!？」

ミュトスは背後を振り向き槍を構える。

そこにはヨルズの姿があった。

「まさか・・・オーデインが来ていたなんて」

リンスは腰部に展開させた粒子砲を放つ。

「あのミュトスは・・・そうか」

ミュトス・オーデインはそれをかわしヨルズに間合いを詰める。

「お前がリンス・ルウ・ライラか？」

オーデインは槍をヨルズに振り下ろす。

「それがどうしたの？」

ヨルズはサーベルを抜きそれと鏝せり合う。

「ある“男”からの伝言だ!“ラグナレクは完成した”だってよ!」

オーデインは槍を横降りし、ヨルズを吹き飛ばす。

「やつぱり・・・ラグナレクが」

ヨルズは体制を立て直しサーベルを構え追撃に備える。

だがその追撃はこずオーデインは槍の粒子を消した。

「今のオレへの命令はヘイムダルの破壊だ・・・お前じゃない」

オーデインはヨルズに背後を見せる。

「ヘイトは殺らせないわ・・・」

リンスはオーデインの背後に切り掛かる。だがオーデインの槍の反

対の柄から刃が現れヨルズの脇腹部を掠めた。

「くっ・・・」

ヨルズは後ろに下がり射程範囲内から離れた。

「ヘッ・・・じゃあな?リンス嬢」

オーデインはそのままその場を後にした・・・

ベットの中、ミオはゆっくりと眼を開ける。

「……………うん……………」

身体に掛けられていた布団がずり落ち白い綺麗な肌がその下から現

れた。

シヨーツだけを穿いていただけだったミオは眼を擦りフラフラとした足取りで布団から出て凹凸の無い身体をさらけ出しながら歩きハンガーに掛けていたその肌と同じ位の純白のワンピースをその上から被るように着た。

そして、冷蔵庫に入れていたミネラルウォーターのペットボトルを出し蓋を開け二口、口に含んだ後それを冷蔵庫に直した。

「……………ふぁ……………」

欠伸を手で隠しながらミオは自分の機体の状態を確かめる為部屋を後にした。

* * *

・フューチャー社の近くの空き地・

「……………アキラ」

リオウはベンチに座りながらヘイトの背中を見つめる。

「ありがとな？あの時お前が助けてくれなければ俺は……………」

「……………」

ヘイトは無言で背中を向け蒼い空を見つめていた。

「なぁ……………俺達はやっぱり戦わなくてはいいんじゃないのか？」

「……………」

「アキラ……………戻ってこい」

リオウは立ち上がりヘイトの横に立ちその肩を掴んだ。

「まだ……………」

ヘイトは小さく呟く。

「……………え？」

「……………まだ全てが終わったわけじゃない……………終わっていないんだ」

「アキラ」

「その名前は全て終わってから名乗るよ……………憎しみ（ヘイト）」

”はまだ終えていないのだから”

ヘイトはリオウに微笑みその場を後にする。

残されたリオウはその背中を見つめ小さく呟いた。

「アキラ・・・憎しみから生まれた争いはいつか自分の身を滅ぼすぞ・・・」

* * *

「先刻前刻の戦闘で私の部下達を助けて戴き有難うございます
スズカは軽く頭を下げソファーに座っているリンスに言う。

リンス達はさっきの戦闘の後、生存者のリオウ、アッシュ、レンカを助け此処フューチャー社に来ていた。

「別に構いませんよ・・・私達はただ貴女に会う口実の為に彼等を助けただけですから」

リンスはスズカに微笑みかけ答える。

「何が望みなのですか？」

スズカはリンスと正面にあるソファーに腰を下ろす。

「此処の設備を少し拝借して欲しいだけですよ・・・後は貴女の今、現在知っているリベレイターの情報を・・・」

リンスは今度は鋭く睨みながらスズカを見つめる。まるで敵を見るような目付きだった。

「ふふ・・・どうやらそちらが本命のようですね？・・・良いでしょう。お教えしますわ私の知っている全てを・・・」

そう言つてスズカは立ち上がりデスクに置いてあるパソコンを操作する。するとカーテンが閉まり部屋の明かりが消え大きなディスプレイが天井から現れた。

そしてそのディスプレイには漆黒の宇宙が映し出されていた。そして映像は拡大されていき一つの大きな建造物を捕らえた。

それは紅い大きな刀身を持つ“何か”だった。
リンスはそれを見つめたため息を漏らした。

「『ラグナレク』・・・本当に完成していたなんて」

スズカは後にキーボードを叩き次に漆黒のミュトスの映像を映し出した。

「オーデイン……彼の有名な神。その神を現在操っているのは“戦争屋”カルマ・カーニツグ……」

「カルマ!？」

リンスはその名前を聞き驚く。その名前は国際指名手配された男の名だったからだ。元々傭兵だった彼はその性格からか敵味方問わず大量虐殺を行った戦闘狂。それが原因で指名手配された彼だがある日その姿を消してしまったという。

「まさかそんな男がオーデインに……」

「まあ、嫌われている彼ですが腕は超一流ですからね……そこを買われたのでしょうか。恐らく……」

スズカはパソコンの操作をやめカーテンを開け明かりを点ける。

「私の情報はこれだけですよ?」

スズカはソファアに座る。

「……これからどうします?」

「宇宙そふに上がります。ラグナレクを止めなくちゃ……」

リンスは手をにぎりしめ俯く。

「では、手配をしましょう……」

「!？手配って」

「ラグナレクの威力は貴女もご存知でしょう?時間がありません・私が今から宇宙に上げるための手配をしますわ。貴女はミュトスの予備パーツ、ミュトスを艦の中に収容してください。役割分担当の方が良いでしょうか?」

スズカはそう言いリンスの両肩を押し外へと出した。

「そうね……」

リンスは走りミュトスがある収容場を目指した。

「時は一刻を争います……恐らくあちらには“L”も……」

スズカは眩きパソコンを操作した。

セツカはリンスの情報を聞きヘイト達を艦に戻るよう連絡した。

「まったくあの娘だったら、いきなり宇宙に上がるて言うんだから・・・」

セツカはふて腐れながらも艦の調整をユウキと共に熟していく。

「ですが仕方ありませんよ？リンスちゃんから貰った情報によるとこのラグナレクって兵器は一度放たれると地球の半数以上の生物が死滅するようですから・・・」

ユウキはディスプレイを見つめキーボードを叩く。

「最高の大量破壊兵器ってか？リベレイターめ、奴らの目的は最初からこれだったのか・・・」

ジンはブースタの連結作業を進ませながら答える。

その時、警報音がブリッジ内に響き渡った。

「敵機がフューチャー社に向かって来ました。数は二十!!」

「チッ！敵さんは俺達を宇宙に上げたくないってよ？」

「フューチャー社のH E Aが展開しました。」

「ジン！作業を急がして!!」

「分かってる!!」

ジンはディスプレイを見つめながら連結作業を急がせた。

* * *

「リオウ！」

アッシュはリオウを見つけ引き止める。その横にはレンカの姿もあった。

「アッシュ・・・お前は左眼を怪我してるんだ。大人しくしている」

アツシユは先刻の戦いで左眼を負傷していた。レンカも右腕を骨折していた。

「わかつている・・・ただ言いたい事があつてな」

アツシユはリオウの横まで歩み寄り耳元で呟いた。

「死ぬなよ・・・」と。

そう呟いた後アツシユはリオウの横を通り過ぎその後ろにレンカが付いていった。

「・・・言われなくても、な？アキラ・・・」

リオウは振り向き壁にもたれ掛かるヘイトを見る。

「急ぐぞ・・・ヴォルヴァの発進まではまだ時間がある・・・なんとしても食い止めるんだ」

ヘイトはそう言いヘイムダルのコクピットに乗り込んだ。

「・・・世界を護る為に・・・」

リオウもゲリに乗り込んだ。そしてヘイムダルの後に付いて発進した。

ヘイムダルはライフルを放ち向かってくるゲルを破壊する。

「所詮は量産機ッ！！」

ヘイムダルはサーベルを抜き向かってくるゲルのマシンガンを左右に避け上半身と下半身を真っ二つに切り裂いた。ゲルはそのまま空中で爆発し、姿を消した。

「アキラ！出来るだけ街の外で戦うんだ！」

リオウは注意しながらライフル放ちゲルを墜としていく。

「・・・ヘイト・・・手伝う・・・」

ミオの黒い戦闘機、ノートは右翼に装備されたライフルを放ちゲル達を墜としていく。そして街内にいる最後のゲルをノートを変形させシールドの粒子ソードで腹部を貫き爆発させた。

「・・・リンスは忙しいから・・・戦力はヘイト、私、リオウさんだけ・・・」

「そうか・・・サンキュミオ。リオウまずは外の敵を！！」

「わかっている！！」

リオウはヘイムダルの後を追う。

「……………」

ミオもその後続いた。

外にはゲルの他に違う機体が数機いた。

それは紅い翼をもつH E Aだった。それはヴァルキュリアと呼ばれるH E Aだった。ヴァルキュリア・ラーズグリーズ。

ラーズグリーズはその手に持っている大きな剣を構えヘイト達に切り掛かって来た。

ヘイト達は散開してそれを避ける。

「クツ！どうやらリベレイターの新型のようだ」

ヘイムダルはライフルを構えラーズグリーズに向かって放つ。だがラーズグリーズは翼を前に展開させ粒子を防いだ。

「どうやらゲルとは違うようだな」

リオウは粒子サーベルを抜き切り掛かる。

だがそれは避けられ空を斬った。

ラーズグリーズはすかさずリオウに向かって粒子ライフルに変形させた大剣でリオウのゲリに放った。

「……………」

ラーズグリーズの粒子はノートがリオウの前に移動してシールドで防いだ。

「済まないな・・・ミオちゃん」

「……………いえ……………」

ミオはそう答えた後、サーベルを抜きラーズグリーズに切り掛かった。だがそれもリオウと同じで空を斬った。だが・・・

「……………見切ってる……………」

ノートのシールドの粒子ソードが延びラーズグリーズの胸部を貫いた。

バチバチツというスパーク音の後ラーズグリーズは爆発した。

「……………射撃武器では翼で防がれる……………近接攻撃はこちらの動きを詠

まれ避けられる…けどそれは一度だけ……二度目の攻撃は見切られない……」

ミオはそう言い、機目のラースグリーズをさっきと同じように破壊していく。

「成る程な……」

リオウ、ヘイトもそれに続きラースグリーズを破壊していった。

その時、リンスから通信が入った。

『ヘイトさん、ミオちゃんこっちの作業が終わりました……撤退して下さい』

ヘイトは向かって来るゲルをライフルを放ち破壊する。

「……ヘイト…時間…」

ノートがヘイムダルのライトアーマーを掴む。

「だがまだ……」

“片付いてはいない”と言おうした時リオウが。

「アキラ。もう良い……後は俺がやる」

「しかし……」

「お前がやるべき事はこんな事じゃない」

リオウはライフルの弾をリロードしゲルに放つ。

「行け！！お前のすべき事をするために！」

「……ヘイト……」

ヘイトは数機のゲルと交戦するリオウを見つめる。

そしてミオのノートを見て

「……ああ、行こう」

ヘイムダルはバックパックのバーニアを噴かせ戦闘区域を離脱した。ノートも戦闘機に変形しその後続く。

だがゲルはそれを見逃さず追う。

「行かせるかよ」

リオウはライフルを放ちそのゲルを破壊する。

「来い！！」

リオウはゲリの腰部に装備された粒子サーベルを抜く。

「じゃあ行かせてもらおうか!!」

突然リオウに向かって突っ込んで来た黒い機体がぶつかつた。

「さあ!!オレを愉しませて見せるよ!!」

漆黒の槍を持つミュトス、オーデインは槍の先端部から孔雀石のような輝きを持つ粒子の刃を出現させる。

「クツ!カルマ・カーニツグ・・・貴様も此処に」

リオウはオーデインに切り掛かる。

「ヘッ!戦いがオレを呼ぶんだよ!!全てを破壊しろってなあ!!」

オーデインはゲリのサーベルを槍で鏝ぜり合う。

「ちっ!貴様のような信念も持たない奴が!!」

リオウは膝部でオーデインの胸部を蹴つた。

「シンネン?生憎オレ様の辞書にはそんな用語は存在しないのよ!!」

オーデインは体制を立て直しマニピュレーターに装備された粒子砲を放つた。

「人間のクズが!!」

リオウはそれをサーベルで斬り防ぐ。

「オレは本能に従い生きている!人にとやかく言われる筋合いはねえんだよ!!」

オーデインは爪先部の粒子の刃を出しゲリのレフトアーマーを切り裂きレフトアームを切り落とした。

「じゃあなあ!!」

オーデインは槍を構える。だが槍の刃はゲリには届かずゲリの前にある刀に防がれた。

「なんだあ?てめえは!!」

「アツシュ・・・」

リオウは自分の前にいる真紅のゲリを見つめて呟いた。

「リオウ・・・どうやら俺がいなけりゃいけないようだな?」

アツシュはリオウのゲリを見て笑う。

「お前・・・目が」

「そんな事は良い・・・くるぜ」

アツシユは日本刀、MURAMASAを構えた。

「オレの邪魔をしようたあ良い度胸じゃねえか!!」

オーディンは槍で真紅のゲリを突く。

だが刃はゲリの日本刀に防がれる。

「なに!? グングニルがただの実体剣に防がれるだと!？」

アツシユはさらに腰部に装備された剣を抜きオーディンのレフトアームを斬る。

「チイ」

オーディンのレフトアームは装甲が砕かれ内部構造部が剥き出しになった。

オーディンは槍を横降りに振りゲリを吹き飛ばし間合いを取る。

「へっ! たいした事はねえな? てめえも」

アツシユは刀、剣を構える。

そして剣を振りオーディンに斬り掛かる。

「テメエ!!」

オーディンはそれを槍で鏝ぜり合う。

「そら! もう一丁!!」

アツシユは刀でオーディンのレフトアーマーを切断した。

その刃はさっきの刃とは違いオーディンの装甲を砕くのではなく切断した。

「ぐあああ!!」

オーディンはその後ゲリに頭部を蹴られ下にある海に落とされた。

「アツシユ・・・その刀は?」

リオウは刀を見てアツシユに問う。

「ああ、此処に来る前に何か装備がないかと調べたらあったんだ・・・コンテナに入っていてな確か“ユグなんとか”て書いていたな」

「“ユグドラシル”・・・」

リオウは小さく呟いた。

(ユグドラシル・・・アキラによるとミュトスの動力源らしい。だ

がそれはリベレイターにしか存在しない筈だ・・・スズカか？だがもし手中にあるなら彼女ならもっと早く使用する筈だ。裏に誰かいるのか？ゼニウス、リベレイターに通じる誰かが・・・？)

「リオウ！！危ねえ！」

アッシュの叫び声と共にリオウのコクピットが揺れる。

オーデインの槍がリオウのゲリの頭部を貫いた。

「ぐあっ！！！」

リオウのディスプレイは波が入るが直ぐにサブカメラの映像へと切り替わる。

「どいつもこいつも皆殺しだあ！！！」

オーデインは海上に上がり投げた槍がオーデインのマニピュレーターに収まる。

「リオウ！さがれ！！後は俺がつ・・・」

「逃がさねえよ！」

オーデインは一瞬に間合いを詰めアッシュのゲリのライトアーマーを掴む。

「なに！？速い！！」

オーデインのマニピュレーター砲が掴まれたライトアーマーに直撃した。

「チイッ」

アッシュはレフトアームに握られている刀を奮う。

だが槍に防がれる。

「アッシュ！！！」

リオウは叫ぶ。

だがリオウの機体にはもうサーベルを形状するほどのエネルギーは無かった。

「じゃあなああ！！！」

オーデインの爪先部の刃が現れアッシュのゲリを貫いた。

バチバチと機体はスパークする。

だがゲリはオーデインからは離れなかった。

「ま、まだだ・・・」
ゲリは刀でオーデインの胸部を突き刺した。
「き、貴様ツ・・・!!」
それと同時にゲリは爆発する。
オーデインも爆発に巻き込まれ海へと落ちた。
「ア、アツシユウウウ・・・!!!!」
リオウの声が響き渡った。

* * *

ヘイムダルは動きを止め振り返った。
「・・・リオウ？」
確かに今リオウの声が聞こえた。そんな気がしたヘイトは来た方向を見つめた。

ミオはそんなヘイトが気になり聞く。
「・・・ヘイト・・・？」
ヘイトはミオの声で振り向き首を振る。
「・・・なんでも無い。行こう・・・」
ヘイムダルはバーニアを点火させた。
「・・・ん・・・」
ミオは首を傾げその後を追った。

「セツカさん。物資の収容完了しました。」
ユウキはディスプレイを見てセツカに知らせた。
「そう、ありがとうユウキ・・・ジンそっちの方は？」
「こっちも今完了した」
ジンは腕を伸ばしながら答える。

「じゃあ、セツカさん、発進させて下さい」

リンスが作業を終わらせブリッジに入り言った。

「え？でも、ヘイト達がまだ・・・」

セツカはリンスの言葉に驚く。

「時間がありません。報告によると先程オーディンと思われる機体がこの近くで確認されたようです」

「オーディン・・・明らかに今までのH E Aの性能を上回る機体・・・」

ユウキはディスプレイにオーディンのデータを映しだし呟く。

「すでにヘイトさん達にも連絡をしています・・・ノートの起動力、ヘイムダルの“ラグナレクシステム”があればヴォルヴァに取り付けられると思います」

“ラグナレクシステム”ヘイムダルに装備された隠された力。

これはユグドラシルの生産エネルギーを各部装甲を展開させ、一定時間機体性能を飛躍させるシステムである。そのエネルギーは機体装甲を覆い粒子兵器を含む全ての外部からの攻撃を無力化する事が出来る。ウインロッドは『恐らくラグナレクという厄災に反応してこのシステムが作動した』と言った。“ヘイムダル”、(ラグナレクを知らせる者)も恐らく此処から来たのだらうと言われている。だが、このシステムには欠点がありユグドラシルのエネルギーを機体全部に行き渡らせるといふ無茶な行いは長く続かず約10分足らずでオーバーヒートを起こし機体のシステムが停止してしまう。

「分かったわ・・・ヴォルヴァ、発進します」

「了解！ヴォルヴァ発進。」

ジンは舵をにぎりしめる。

ヴォルヴァは浮上し地面にほぼ直角に飛んだ。

リンスもシートに座り身体を固定する。

ヴォルヴァはスピードを上げブースタがフル稼働した。

「…………ヘイト…………」

「ああ、急ぐぞ！」

ヘイト達は空に上がるヴォルヴァを確認した。

「ミオ先に行け！俺は後ろの奴らを……」

「…………ん…………」

ミオは小さく頷きノートのスปีドを上げた。

ヘイムダルは振り返り後を追うゲルにライフルを放つ。

ゲルはそれを避け、ヘイムダルに近づく。

「邪魔だ！」

突然ヘイムダル全体が孔雀石のような輝きの光りが包み込まれた。

そしてヘイムダルはサーベルを抜きゲルを切り裂いた。

ゲルはスパークを放ち真つ二つに裂かれ爆発した。

「急げ……ヘイムダル」

ヘイムダルは急ぎノートの後を追う。

ノートはスปีドを上げヴォルヴァの後部に追い付いていた。

「…………もう少し…………」

そして変形させ左腕でヴォルヴァの装甲にマニピュレータを引っ掛けた。

「…………ヘイトは…………？」

ミオは振り返りヘイムダルの確認をとる。

「…………ヘイト…………！」

ヘイムダルは装甲からユグドラシルの光りを放ち直ぐ傍まで来ていた。

「ヘイムダル……」

ヘイトはヘイムダルのバーニアをフルに使いヴォルヴァに追い付こうとする。

「…………ヘイト…………！」

ミオはノートの右腕をヘイムダルに差し延べる。

「うおおおー！」

ヘイムダルも左腕を前に突き出す。

2機のマニピュレータの間隔は徐々に近づく。

「……くっ……」

そして、遂に2機のマニピュレータ両方お互いが掴んだ。

それと同時にヘイムダルのラグナレクシステムが機能を停止させ、

ヘイムダルの装甲を覆うユグドラシルの輝きが失った。

「……ヘイト……」

ミオはノートの右腕を引きヘイムダルは右のマニピュレータでヴォルヴァの装甲にマニピュレータを引っ掛ける。ヘイムダルと、ノートはお互いの頭部を交差させた。白と黒のミュトスはお互いを見る。

「……ヘイト……」

ミオはヘルメットを取りディスプレイに映るヘイムダルを見る。

「ミオ……」

ヘイトもヘルメットを脱ぐ。

そしてノートを見て微笑んだ。

ヴォルヴァはさらにスピードを上げ2機の、白と黒のミュトスと共に宇宙へと飛び出した。

ラグナレクを破壊する為に……

人物紹介

ユウキ・シャルマー

年齢 19歳

髪の色 グレー

姓で分かるようにウィンロッド・シャルマーの娘。
リンス・ルウ・ライラの従姉妹になる。

父親と同じくメカの扱いが上手く普段は父親のサポートをしていた。
(途中でオペレーターになるが暇があれば父親の手伝いをしている)
趣味は父親と同じくメカ弄り。母親はユウキを産んですぐに他界し

ており父親一手で育てられたのが原因だと思われる。容姿は大和撫子のようで可憐な雰囲気をしている。髪も長く腰辺りまで伸びている。普段は邪魔にならないよう一つに纏められている。

因みに彼女の悩み事は自己主張が大きい胸である。ようするに大きい胸が彼女の悩ましい。普段、リンスにからかわれ揉まれて困っているらしい・・・

リンスは『これは絶対Gは越えているわ』と言っている。

カルマ・カーニツグ

年齢 32歳

髪の色 ダークブルー

傭兵。過去に大量虐殺を行い国際指名手配されている。その言動、態度から分かるように殺しをもう飲食と同じようにしか思っていない。当たり前前の事、当然の事だと思いい人を殺している。十年前彼はヘイト・ディスター（アキラ）の両親をオーディンを駆け殺害した。そしてそれつきり姿を消していたが十年後、現在また、姿を現した。一応彼はリベレイターと共に戦っているが実はリベレイターには参加していない。一匹狼が好む彼は群れるのが嫌いだかららしい。因みに彼の敵機を破壊する時の『じゃあな』は口癖らしい。容姿は二枚目俳優のような性格に似合わない顔をしている。髪も男性にしては長く背中位まで伸びている。

【機体説明】

リベレイター第2期シリーズH E A

『ヴァルキュリア』

ラーズグリーズ

型式番号 LR-20V

頭頂高 18.0m

本体重量 6.3t

全備重量 7.6t

ジェネレーター出力

4500kw

スラスタ総推力

ユグドラシルのエネルギーでの稼働なので推進剤を必要としない。
動力

ユグドラシル不純石

センサー有効範囲

4000m

武装

粒子サーベル×2（脚部にマウントしている）

粒子サブマシンガン×1

防翼『ヴァルクキュリア』×2（バックパックに装備されている）

リベレイターの第2期シリーズのHEAである。遂に量産機にも粒子兵器を装備させる事に成功させた機体。

天使を思わせる形状をしている。頭部も以前のゲルとは違いツインアイカメラが採用されている。そしてアンテナは額の中心に付けられ一角獣のような感じになっている。

武装の粒子ライフルはノートと似てマシンガンになっている。サーベルもミュトス達とそう変わらず出力も十分にある。

そして特徴の翼は前に展開させシールドを装備されていないラースグリーズの盾となる。

だがそれはある程度の攻撃だけで出力の高い攻撃は防げない。（粒子サーベルのような収集された物は防げない）

パイロットは以前のゲルと同じく乗っており、AIが使われてい

る。AIも大分改良されたらしく相手の攻撃をある程度避けるようになった。

そして動力の『ユグドラシル不純石』はミュトスのユグドラシル鉱石とは違い出力は劣るが人工的に大量生産が可能になっている。

出力以外に違う所は色が孔雀石のような輝きを持たず濁った緑色をしている。

機体のカラーリングはレッド。

名前は北欧神話のオーディンの配下天使『ヴァルキリー』、(計画を壊す者)ラーズグリーズである。

M - 9 : 『弱音…吐かない…』

リオウは半壊したゲリをH E Aデッキに收容する。

あれからリベレイターはヘイムダル達が宇宙に上がったのを確認し、撤退行動をとりこの中域を離れた。

「……」

リオウはハッチを開けリフターを使い地面に降りる。

「リオウ……」

リオウの前にレンカは立っていた。

リオウはそれを確認し、立ち止まる。そして……

「アツシユは戦死した……」

と、レンカの耳元で消え入りそうな声で呟きその場を後にした。

レンカはリオウの姿が消えた後地面にしゃがみ込みただ想う彼の名を叫んだ。

* * *

宇宙、漆黒の闇の中一つの蒼い戦艦はある場所を目指していた。

「じゃあ、作戦を説明するわ……まず、ヘイムダルとノートで敵機を艦に近づけないようにして」

セツカは作戦を全員に説明する。

「そしてヨルズはヴォルヴァと共にラグナレクに向かうわ……そしてラグナレクの装甲を破壊し、ヨルズは内部に侵入……内部からラグナレクを破壊。戦力は少ないけど皆頑張って」

「ああ……」

「……ん……」

「はい」

ヘイト、ミオ、リンスはそれぞれに答えた。

「じゃあ、作戦開始は20分後よ・・・死なないでねみんな一緒に帰りましょう・・・」

セツカはそう言った後部屋を出て行った。

「それじゃあ、行きますか？」

リンスは笑いながら明るく言う。

「……………」

「・・・ああ」

ヘイトとミオはリンスの後を追い部屋を出た。

「おい！ヘイト待て」

突然ウィンロッドがヘイトを引き止める。

「ウィンさん？」

ヘイトは立ち止まりミオに先に行くよう言いウィンロッドを見る。

「どうしたんですか？いきなり・・・」

ウィンロッドはヘイトを見て笑みを零すしながら

「変わったな・・・お前も」

「何が、です？」

「少しだが明るくなったって所だ・・・お前さんは何時も仏教面していたからな？」

「・・・何もないなら行きますよ？ミオが待ってますから」

ヘイトは若干ふて腐れた顔をしながら言う。

「まあ、待て。良いかヘイト・・・恐らくこの戦いで全てが決まると思っいいい・・・世界の、人類の命はお前に懸かっているんだ！」

ウィンロッドはヘイトの両肩を掴み瞳を見つめる。

「分かってますよ・・・そんな事は前から」

ヘイトもウィンロッドを見る。

「・・・そうか、なら良いんだ」

ウィンロッドはヘイトを離しその場を立ち去る。

「ああ、そうだった・・・ヘイムダルのラグナレクシテム。あれの使用は極力避けておけよ？」

ウィンロッドは背中を向けたまま言った。

「だが、あれは必要な力だ・・・恐らくこの戦いでも必要となる」
ヘイトは天井を見ながら答える。

「だろうな・・・だからヘイムダルには追加装甲を付けた・・・今までは機体がユグドラシルのエネルギーに耐え切れなかった。だから追加装甲を付け耐久力を上げた」

ウィンロッドはそう言い歩き出した。

「・・・ウィンさん」

「言つとくが気休めだぞ？あんまりあてにはするな」
そう言いウィンロッドは歩いて行ってしまった。

「・・・最期の戦うか」

そう呟きヘイトはミオ達の後を追った。

「ミュトス・ノートシステムオールグリーンです。カタパルトデッキに移動します」

ノートは左にスライドしカタパルトデッキに移動する。

「.....」

「カタパルト接続を確認しました！発進タイミングをノートに移行します」

ノートのレッグがカタパルトに接続した。それと同時にハッチが開放していく。

「.....了解.....ノート、行きます.....」

ランプがレッドからブルーに変わりノートのカタパルトはスライドし、ノートは宇宙空間に飛び出した。

「ヘイムダル発進シークエンスを開始します」

ユウキはヘイムダルのシステムを確認して言う。

「了解した・・・ヘイムダル、システムオールグリーン」

ヘイムダルは左にスライドし、カタパルトデッキに移行する。

「カタパルト接続を確認！システムオールグリーンです！ヘイトさ

ん発進どうぞ！」

「ヘイト・ディスター・・・ヘイムダル・ラグナレク発進する！」

ヘイトはグリップを前にスライドさせヘイムダルを宇宙空間に飛び出させた。

漆黒の闇の中一つの銀色の装甲を持つヘイムダルが飛び出す。

「ヨルズはヴォルヴァの上で待機していて下さい」

ユウキの通信がヨルズのコクピットに入る。

「分かったわ」

ヨルズはカタパルトに配送されず後部デッキから現れヴォルヴァの上立ち待機した。

「ミオ・・・」

ヘイトはノートに通信を入れる。

「……………ん……………？」

ミオは首を傾げながら不思議そうにディスプレイに小さく映るヘイトの顔を見る。

「これが最期の戦いだ・・・生きるよ」

「……………ん……………」

ヘイトはその声を聞き通信をきる。

(そうだ・・・生きるんだ・・・そして帰ろう。俺達の、居場所に)

ヘイムダルはスピードを上げノートの前に出る。

(……………生きる……………前までは否定してたな…そんな事は…でも今は違う…帰る場所があるから……………)

ミオはノートを戦闘機からH E A形態に変形させる。

そしてそれと同時に先の方で未確認物体の確認が捕れた。

「・・・ミオ！」

「……………ん……………」

それと共に数十機のH E Aが確認されヘイムダル、ノートは武器を構えた。

「はああああ！…！」

ヘイムダルは新たに装備された腕部の装甲にマウントされていた粒子サーベルを抜き向かって行き先攻するゲルを切り伏せた。バチバチと機体はスパークし、ゲルは爆発する。

「……………」
ノートは粒子マシンガンを放ち向かってくるゲルを破壊する。すると突然ノートのコクピット内に警報音が鳴り響く。

「……………分かつてる……………」
ミオは呟き腰部に装備されている粒子サーベルを抜き逆手に持ち後ろに突き刺す。

背後にはサーベルで切り掛かろうとしていたラズグリーズがいた。ラズグリーズは胸部が貫かれスパークを放ち爆発する。

「……………分かるから……………」
ミオはサーベルを腰部に戻しマシンガンを構え直しゲルを撃ち抜いていく。

「ユウキ！敵機を取り付かせないようにして！」
セツカは叫びユウキに命令する。

「はい！粒子圧縮ミサイル発射します！」
ヴォルヴァに装備されたミサイルが敵機を捕らえ命中して破壊していく。

「ヴォルヴァ！このまま突き進む！！」
ジンは舵をにぎりしめヴォルヴァを前進させる。

「ヘイムダル達が今敵機と交戦しているからこのC07のルートが手薄よ」

セツカはディスプレイを確認し状況把握を続ける。

「へえ、中々やるじゃないセツカさん・・・よつと！」
リンスは近づいてくるラズグリーズをスナイパーライフルを構え撃ち抜いた。

ラズグリーズはいきなりの攻撃で対応できず胸部を撃たれ爆発す

る。

「敵がないから楽に狙い撃てるわ・・・案外楽ね」
今のヨルズの装備は元々の装備に変更されていた。

敵機の射程外で敵を葬ればこちらの被害が抑えられるからである。
戦力の少ない事を考えでの作戦だった。

ヨルズはこの後、装備を何時もの装備に変えラグナレクを破壊する。
つまりヘイムダル達を囷に使い本命の火力に長けたヨルズで目標を
破壊する。それが今回の作戦である。

「ミオ！右を・・・！」

ヘイムダルはライフルを放ちラーズグリーズに命中させる。だがラ
ーズグリーズは翼でそれを受け止めた。

「……………」

ノートはシールドの粒子ソードを出しラーズグリーズを胸部から腰
部にかけて斜めに切り捨てた。

ラーズグリーズは切り口からスパークを放ち爆発する。

「やっぱりつらいな・・・次々に出て来る・・・」

ヘイムダルは腰部のサーベルを抜き近付くゲルを串刺しにする。

「……………弱音……………吐かない……………」

ノートはシールドの粒子砲を放ちゲルを破壊する。

「わかっている・・・だがこの数はツ！！」

ヘイムダルはライフルを乱発し、回りのゲル達を破壊した。

だが、突然ヘイムダルのコクピットに振動が襲った。

「ぐあああッ！！」

ヘイムダルはバックパックに攻撃を受け怯んだ。

「……………ヘイト！！……………」

ノートはさらに追撃が来る粒子攻撃からヘイムダルをシールドで護
りながらヘイムダルを引つ張り攻撃を避ける。

「くっ！この攻撃は！？」

ヘイムダルも体制を立て直し攻撃をシールドで防ぎながらライフルを放ち迎撃する。

「クククッ！さあ見せてみるよ！貴様の實力を！！」

漆黒の機体はヘイムダルに突っ込み槍を奮う。

「くっ、貴様は・・・カルマ、カルマ・カーニッグー！」

ヘイムダルはシールドを構えそれを受け止める。が、シールドは粒子の熱量に耐え切れず溶解し真っ二つに裂かれた。

「クッ！」

ヘイムダルはシールドを捨て腕部にマウントされた粒子サーベルを抜いた。

「……オーデイン……装備が……」

ミオはオーデインを見て驚いた。漆黒のボディは変わらないが頭部は6本のブレードアンテナが額から突き出し、ツインアイカメラは消え四つの眼に変わりその頭部だけでも禍禍しい雰囲気を漂わせている。そして腕部の装甲、肩の装甲は鋭い刃が突き出していた。

「……この男……危険……」

ノートはサーベルを抜き切り掛かろうとしたが、ラーズグリーズの攻撃により阻まれた。

ラーズグリーズのサーベルとノートのサーベルが鏝ぜり合いを演じる。

「……くっ……」

ノートはラーズグリーズを膝蹴りし、怯んだところをシールドの粒子ソードで真っ二つに切り捨てた。

「……ヘイト……」

ノートはオーデインと交戦するヘイムダルに近付こうとする。

だが又しても数十機のゲルに囲まれてしまった。

「……邪魔……」

ノートのシールド粒子ソードの出力が上がった。

「ハハハッ！！テメエを思い出したぜ！？十年前のガキかあ！！！」
オーデインは槍を奮いへймダルを追い詰める。

「クツ！前とはパワーが・・・」

へймダルは槍を受け止め切れず吹き飛ばされる。

「俺が憎いだろう！？殺したいだろ！？」

オーデインの槍の嵐が続く。

「憎しみはいいぜ！？憎悪があればそいつは強くなる！！憎む心が人を！！人間を強くするんだ！！」

へймダルのサーベルは遂に耐え切れずスパークを放ち粒子のサーベルが形状を失った。

「クソッ！」

へймダルは使えないサーベルを捨て新たに腰部に装備されたサーベルを抜きオーデインの槍を受け止める。

「ククク！！オレア嬉しいんだぜ？ちっぽけなお前が俺を憎み此処まで強くなった事をなあ！！！」

オーデインはマニピュレーター砲を放ちへймダルの肩部装甲に命中させた。

装甲の外部が剥がれ今までの内部の装甲があらわになった。

「まだまだ！！」

へイトはへймダルのラグナレクシステムを発動させた。

へймダルの装甲の回りにユグドラシルの光りが包み込んだ。

「さあ！来いよ！！殺してやるからよッ！！！！！！」

オーデインは爪先部、膝部、甲部から粒子の刃を出現させた。

「うおおおおお！！！！！！」

へймダルは接近し、オーデインに切り掛かる。

へймダルの紅い粒子の刃はオーデインのグングニルによって防がれる。

「ハハハッ！！その程度か？」

オーデインは膝部の刃でへймダルを突き刺すように蹴る。

「クソッ！」

ヘイムダルは一瞬で後退し背後に回り込みライフルを放った。

「あめえんだよー!!」

オーデインはマニピュレーターを掲げライフルを防いだ。

「なに!？」

「じゃあな!!」

オーデインはヘイムダルに向かってグングニルを投げる。

「うあああ!!」

ヘイムダルの右腕はグングニルの刃に持って行かれた。

グングニルはその後オーデインの元へと戻る。

「終わりだ・・・」

オーデインはヘイムダルに接近し、ヘイムダルに槍の刃を振り落とす。

「……駄目……」

バチチツ!とスパーク音が鳴り響く。

ヘイムダルの前にノートが現れ、ノートはヘイムダルを庇った。

グングニルはノートの右胸部を切り裂いた。

「……クウウ……!!」

ノートのディスプレイは割れその破片がミオの額に突き刺さる。

「ミオツ!!!貴様ツ!!!」

ヘイムダルはサーベルでオーデインに切り掛かる。

オーデインはそれをマニピュレーターで受け止める。

マニピュレーターとサーベルの刃がスパークを起こした。

「チツ!邪魔が入ったか・・・」

オーデインは一端後退しグングニルを構えた、が突然の背後からの攻撃で体制を崩した。

「くっ!?!後ろだと?」

オーデインは振り返り攻撃の来た方向を向く。そこにはヨルズの姿があった。

ヨルズさらにスナイパーライフルでオーデインを狙撃する。

「チイイイツ!・・・新手か・・・少し遊びすぎたか?」

「貴様あー!!」

ヘイムダルがいつの間にか間合いを詰めオーディンのレフトアーマーを切り裂いた。

「クッ! さっきのでバーニアがやられたか・・・部が悪いな・・・仕方ない」

オーディンはグングニルを腕の甲部に収納し撤退した。

そしてヘイムダルの粒子も装甲からは消えていった。

「・・・ミオッ!!」

ヘイトは叫びヘイムダルはノートを抱えヴォルヴァへと戻った。

「ミオちゃん・・・」

リンスもこの区域に敵機の反応を探り何も無いのを確認しヴォルヴァへと帰還した。

「.....」

ミオの額からは血が流れそれは頬の下を辿っていた。

『機体説明』

リベレイター・ミュトス

『ミュトス・オーディンK^{カルマ}』

型式番号 RM-LOK

頭頂高 20.3m

本体重量 6.8t

全備重量 8.3t

ジェネレーター出力

30000kw

スラスタ総推力

ユグドラシルにより必要としない。

センサー有効半径

10000m

武装

粒子槍『グングニル・ツヴァイ』^④ x 1

粒子刃 x 6 (マニピュレーター^⑤の甲、爪先部、膝部に二つずつ装備されている)

マニピュレーター粒子拡散砲 x 2

先刻の戦いで半壊したオーデインが改修され強化された姿。以前の
ような騎士の姿は保っておらず禍禍しい姿をしている。

以前は2本のブレードアンテナが6本に変わり額を左右対称に突き
抜けている痛々しい形をしている。そしてツインアイは無くなり四
つのカメラアイがxを造る感じに並べられている。

主武装のグングニル・ツヴァイは出力が上がり刃を造る粒子は紅い
粒子になっている。それ以外は変更されていない。

そして、変更された武装はマニピュレーター粒子拡散砲である。こ
れは射撃時は粒子が集束し発射され、防御姿勢時は粒子が拡散し、
相手の攻撃を防ぐ事が可能になった。

機体カラーは以前と変更されずブラック。

名称の後の『K』は『カルマ (Karma)』^⑥、(業) という意味
である。パイロットのカルマ・カーニツグが齎した負の遺産である。

M - 9 : 『弱音吐かない』 (後書き)

……人々の心からは争いの灯は決して消えない……だから私達は……
『最終話……“改めてはじめまして”』伝説は伝説に
滅ぼされる……

M・FINAL：『“改めて”はじめまして』

- BH19年 -

ある部屋からテレビの音が聞こえる。

『・・・リベレイターが滅び早くも2年の月日が流れました。我々地球国家は二度とあのような出来事が起こらぬよう日々・・・』
若い女性の声がテレビから聞こえる。

部屋の壁にもたれ掛かる一人の男がいた。

男は顔に狐のような仮面をつけ表情隠している。

「テレビを見ないでほったらかしにするのは感心しませんよ?」

一人の少女が部屋に入って来て男に注意をする。そして

「テレビオフ」と呟きテレビの電源を切った。少女の長い漆黒の髪が摩く。

「・・・」

男は何も答えず少女に歩みより少女が入って来た扉を開ける。

「相変わらず無言なんですね?まあ、良いですけど?」

少女はデスクまで歩きパソコンの電源を入れた。

「・・・行ってくる」

男はその一言を言った後部屋を出ていった。

「・・・まったく、折角拾った命なのにまた戦うのね・・・」

少女、スズカはため息を吐き呆れながらキーボードを打つ・・・

- BH17年 -

ヘイトはミオの横に座りミオの額に巻かれている包帯を摩る。

「ミオ・・・」

ヘイトはミオの前髪を撫で瞳を閉じ立ち上がる。

「行ってくる……」

そう言い部屋を出ていった……

「ジン……?」

部屋を出て直ぐそこにジンが待っていた。

ジンは何も言わずヘイトの頬を殴った。

「……ッ!」

「ヘイト……お前、分かっているのか?」

ジンはヘイトの胸倉を掴む。

「……何を?」

ジンはさらにヘイトの頬を殴る。

ヘイトはその勢いで壁にぶつかる。

「ミオはな、お前の自分勝手の行いで怪我をしたんだ!!」

「……」

(わかってている……分かっているさ)

ヘイトは壁にもたれながらジンを見る。

「お前個人の事であの娘を巻き込んだんだ!!」

「……」

「お前は今私怨で動いていないだろ?もう一度考えろ!!」

ジンは叫びヘイトの横を通り過ぎその場を後にした。

「……クッ!」

ヘイトは壁を殴り俯く。

「わかっている……分かっているんだ……俺の憎しみは後にし、冷静に判断すれば対処出来た事なんだ……なのに、なのに俺は……」

「」

ヘイトは壁にもたれながらHEADデッキへと足を引きずるように歩き出した。

「ジン?何処に行ってたの?持ち場を離れないで!」

セツカは今入って来たジンに注意する。

「ああ、ちよつとミオの様子をな？」

ジンはそう言い操縦舵の椅子に座り舵を握った。

「で？ミオの様子は？」

セツカは問う。やはり彼女も気になったからだ。

「アンの話しによるとまあ出血が多かったらしいが命に別状はないようだ……だが、H E Aに乗る事は出来ないらしい」

「そう……戦力はヘイムダルと、ヨルズのみか……」

セツカはディスプレイを見ながら呟く。

「で？そっちは？敵さんの状況は？」

「今のところは問題は無いわ……リンスが外で待機してくれてるから」

「そう……」

「ヘイムダル！！独断でカタパルトデッキに移動しました！！」

ジンが言う瞬間ユウキの声がジンの声を遮った。

「なに！？」

ジンは振り返りユウキを見た。

「直ぐに止めさせなさい！！」

セツカはユウキに命令する。

「駄目です！すでにコントロールがヘイムダルに移行しています！ハッチが開放されます！」

ユウキが言った後、ヘイムダルが発進した。

「あのバカッ！！私怨で動くなどあれほど言ったじゃねえか！！」

ジンは半分呆れながら言う。

「リンス！彼を止めて！」

セツカはヨルズに通信を開く。

「駄目……」

リンスは小さく呟く。

「ヘイトさんは、彼を止めてはいけない……そんな気がするから……」

「そんな意味が分からない事を……」

「彼の好きにやらせましよう？それより私達はラグナレクを」
ヨルズはすでに高粒子砲装備に兵装を変えていた。

「・・・しかし」

「彼なら大丈夫です・・・必ず・・・」

リンスはもう見えない飛び去った彼を見つめていた。

「決着を着ける！！貴様とツ！！」

ヘイムダルはサーベルを腰部から抜きオーデインに切り掛かった。

「ハンツ！」

オーデインは槍、グングニルを抜き鏢ぜり合う。

バチチツ！！と閃光が走りお互いの機体を包む。

「もう誰も止められはしないんだよ？誰もなア！！」

オーデインはヘイムダルのサーベルを弾き粒子の刃を発生させた脚でヘイムダルを蹴る。

ヘイムダルはシールドを構えそれを受け止める。

そして後退し、ライフルに持ち替えオーデインに放つ。

オーデインはそれを避け、マニピュレーター粒子砲を撃つ。ヘイムダルは避け、避け切れない粒子をシールドで受け止めた。

「ラグナレクは間もなく放たれる！！そして人は一瞬で死に絶える！！一瞬になア！！」

「そんな事、お前の思い通りなどになつてたまるか！！」

ヘイトは叫びヘイムダルのサーベルを抜き切り掛かる。

だがそれは空を切る。

「ハッ！ありゃあ、俺がやっているんじゃないやねえよ！！」

オーデインはマニピュレーター粒子砲を撃つ。

それはヘイムダルのライトレッグに命中し、ヘイムダルのライトレッグは爆発した。

「なに！？」

ヘイムダルは体制を立て直す。

「あれは俺のクライアントが考えた事だ！俺には関係ねえんだよ！」
オーデインはグングニルを構え、ヘイムダルに切り掛かった・・・

* * *

(な、に？この息が詰まる感じは？)

ミオはゆっくりと眼を開ける。

「此処は？」

ミオは身体を起こし辺りを見渡す。

「……ッ！」

突然の痛みで額の包帯を押さえた。

「ミオ！！眼が覚めたの？」

医師のアンがそれに気付きミオの肩を支えた。

「行かなきゃ……」

「え？」

ミオは立ち上がりフラフラと歩き出した。

「ちよつとミオ！待ちなさい！」

アンが急ぎミオの肩を掴み止める。

ミオはその手を払いのけ部屋の扉を開ける。

「アンさん、ごめんなさい……」

ミオはアンの腹部を殴り気絶させた。

そして部屋を出て扉にロックをかけた。

「急がなければ……」

ミオはそのままH E A デッキに向かった。

幸い向かっている途中誰とも会わなかったがH E A デッキにいたウ
インロッドと会ってしまった。

「ミオ！？お前大丈夫なのか！？」

ミオの事について知らないウインロッドはミオが命に別状は無くても
も安静にしなければならぬ事を知らない。

「ええ、もう大丈夫です……それよりノートの状態は？」

「応急処置は一樣済んだからな・・・直ぐにも出せるぞ！」

「そうですね……」

ミオはノートのコクピットを開けシステムを起動させる。

「ウィンさん、離れて下さい出します……」

ミオはノートのコクピットハッチを閉めウィンロッドに言った。

「ユグドラシル安定領域に到達……システムオールグリーン」

ミオはカタパルトデッキに向かわず後部デッキに移動する。

「おい！ミオ！！お前怪我が酷いんじゃないか！！！」

ウィンロッドはやっとミオの怪我の事をユウキに聞きノートを止める。

「離れて下さい！ハッチを壊して出ます……」

ノートはライフルを放ち後部ハッチを破壊した。

後部ハッチの穴からは空気が抜けていく。ノートはその穴を潜り宇宙へと飛び出した。

「どわわわ！！！」

ウィンロッドは直ぐに破壊された後部ハッチを封鎖させた。

「おい！ミオが出たぞ！！あいつハッチを破壊していきやがった！」

ウィンロッドは叫びながらセツカに説明する。

「なんですって！？？」

「クッ！ミオの奴無茶苦茶だ・・・たくっ」

ウィンロッドは頭を掻きながらため息を吐いた。

「セツカさん！ポイントに到達しました」

リンスからの通信がセツカに入った。

「もう、ミオの事は後で何とかしましょう・・・リンス？じゃあ今からラグナレクの破壊を開始して！」

「セツカさん！敵機を数十機確認しました！こちらに向かって来ています！」

ユウキはディスプレイに映る敵機を発見し、叫ぶ。

「やっぱり、来るようね・・・リンス急いで！」

「敵機体照合・・・これはラーズグリーンです！」

「ラーズグリーズが数十機か・・・少しきついわね」

ヨルズはラグナレクの装甲に向かって粒子を撃つ。だが、その装甲が厚く直ぐには破壊出来る代物ではなかった。

「まったく、なんて物を造ったのよ！！私は！！」

リンスは自分にいらつきながらもヨルズの粒子砲を放った。敵機ラーズグリーズはもう眼の前迄来ようとしていた・・・

ミオはノートのスピードを上げある場所に向かっていった。

「この辺りね・・・この違和感の根源は」

ミオは回りを見渡す。そして何かに気付きライフルを放った。ライフルの粒子は何かに弾かれ消える。

「ほう、私の存在に気付くとは・・・」

突然漆黒の宇宙から黄金の翼、装甲を持つH E Aが現れた。

そのH E Aはミュトスのような形をしていた。

「貴方ね？この違和感は・・・」

ミオはライフルを構える。

「まったく、驚かせてばかりだな？そのような事までもが分かるのか？」

若い男の声がミオに問う。

「……確かに、以前の私には分からなかったでしょうね。でも先刻の怪我のお陰で私の“止まっていた時間”が再び動き出し以前の力を取り戻したわ」

ノートはライフルを放つ。だが、黄金のミュトスはマニピュレーターで防いだ。

「止まっていた時間？・・・ふふふ、ハハハツそうか・・・君は過去の産物“アーティファクター”か？」

黄金のミュトスのマニピュレーターから黄金の粒子の刃が現れた。

「・・・ならば君には消えてもらわなければ！君はすでに必要無い存在だ！」

黄金の刃がノートに襲い掛かる。

「……貴方もよッ!!」

ノートはサーベルに持ち替え黄金の刃と鏢ぜり合いをする。

* * *

オーデインとヘイムダルは鏢ぜり合う。

すでにヘイムダルはライトアームを失い残りのレフトアームでサーベルを握りオーデインと戦っていた。

「ハハハッ!! 楽しいよなア!! 小僧!! 人はやはり戦っている今こそ充実した時間を送っているんだア!!」

オーデインはグングニルを振りヘイムダルは弾き飛ばされた。

ヘイムダルは直ぐに体制を立て直す。その瞬間オーデインはグングニルでヘイムダルを突く。「……ッ!!」

ヘイムダルはそれを避けようと回避行動を取るが間に合わず左腰部を掠めた。左腰部の装甲は剥がれ落ち内部があらわになりそこからスパークが走った。

「さあ、もつと俺を愉しませて見せるよ!!」

オーデインはグングニルを振り下ろした。

「俺は貴様とは違うんだ!!」

ヘイムダルはシールドを構えたがグングニルの刃が食い込み、スパークを放ちながら熔解し、切られた。

「……クウッ!!」

ヘイムダルはサーベルでオーデインに切り掛かる。

「一緒じゃねえか!! 俺もテメエも変わらねえんだよ!! 好きじゃ無ければテメエは戦場にはいねえんだよ!!」

オーデインはそれを右に避けその後グングニルがヘイムダルの頭部を左部分を掠めた。ヘイムダルの頭部は左部分、装甲が剥がれレフトアイは割れ鈍く紅い光りを放つ。

「確かに……だが、やらなければならなかったんだ!!」

ヘイムダルはラグナレクシステムを発動し機体全体をユグドラシル

の光りで包み込んだ。

「俺は戦いが怖い！だが戦いからでしか俺の答えが導き出せなかつたんだ！！」ヘイムダルは紅い刃のサーベルを振り下ろした。それはオーデインの右腕を切り落とした。

「戦いが怖いなあ？今更何を言つてやがる！！テメエも俺と同じで人を沢山殺してるじゃあねえか！今更何をほざくツ！」

オーデインはグングニルを構えヘイムダルに向かって付いた。

だがヘイムダルは避けオーデインのレフトショルダーアーマーを貫き破壊した。

「俺もお前も同じ人殺しなんだよツ！」

オーデインは脚の粒子の刃でヘイムダルの胸部を切り裂く。

バチチツとスパークを起こしながらもヘイムダルは切り掛かる。

「俺には目的がある！だがお前にはそれが無い！！だから・・・俺はお前とは違うんだア！！」

ヘイムダルはオーデインの頭部をサーベルで貫いた。オーデインの頭部は粒子の刃で貫かれ爆発した。

「戦いにそんなモノは必要じゃあねえんだよオ！！」

オーデインのグングニルがヘイムダルの胸部を貫いた。バチチツとヘイムダルがスパークする。

「俺は・・・俺は負けない！！」

ヘイムダルはサーベルでオーデインの胸部を刺す。

「な、なにいいい！！」

ヘイムダルはその後爆発し、オーデインもそれに続き爆発した・・・

* * *

「ヨルズ敵を一掃完了・・・」

ヨルズはラースグリーズ全機を破壊した。が、ヨルズ自体もダメーシが深くすでに両脚が失っていた。

「リンス！！その状態じゃ無理よ！一端帰還・・・」

セツカはヨルズに通信を入れるが。

「もう、時間がありません・・・すでにラグナレクのチャージが開始されています！このまま行きます」

ヨルズは戦闘中に開けたラグナレクの装甲を見る。

「無茶よ！今のヨルズじゃあ自ら放つ余波で崩壊するわ！」

「でも、私がいなければ・・・私の性で関係の無い人達が死ぬのは嫌なんです・・・セツカ、離れといて！」

リンスはそう言った後ラグナレクの破壊した装甲から内部に侵入した。

「セツカ・・・後はリンスに任せよう・・・」

ジンは振り向き言う。

「そうですねセツカさん。後はリンスちゃんがやってくれます」

ユウキもディスプレイを見るのをやめ言った。

「ヴォルヴァ後退する」

そう言いジンはラグナレクからヴォルヴァを後退させた。

「戦っていたヘイムダルがシグナルをロストした？・・・ヘイトさん」

リンスは唇を噛み締めヨルズを進ませる。

ヨルズはスピードを上げラグナレクの中心部に到達した。

そこには大きなユグドラシル鉱石が孔雀石の光りを放っていた。

「ユグドラシルはちよつとの攻撃では破壊出来ない・・・」

ヨルズは全ての粒子砲を展開させる。

「・・・ヨルズフルバースト！！」

ヨルズの五つの閃光がユグドラシル鉱石に命中した。

バチチツとヨルズの粒子とユグドラシルは反発し合った。そしてヨルズの肩部、腰部の装甲が余波で剥がれていく。だがユグドラシルの方も変化が起こった。ユグドラシルが少しずつひび割れてきたのだ。

「・・・クツ、頑張つてヨルズ・・・」
ヨルズの装甲は突然、孔雀石の光りに包まれた。
「・・・クツ！」
だが装甲の破壊は進んでいく・・・
ユグドラシル鉱石はひび割れていき砕けていく。
そして遂にヨルズの粒子がユグドラシル鉱石を破壊した。
それと共に爆発を起こし閃光はヨルズを包み込んだ・・・

「ラグナレク破壊を確認しました！」

「よっしゃ！！リンス、やりやがつか！」

ジンは振り返り叫んだ。

「ですが・・・ヨルズのシグナルをロスト・・・」

ユウキはディスプレイに映っていたヨルズの反応が消えたのを確認した。

そしてヘイムダルのシグナルもロストしている事も確認していた。

「お願い！！ヨルズの搜索を！リンスを・・・」

セツカはジんに叫ぶ。

「分かった・・・」

ジンは操縦舵を握りヴォルヴァを発進させた・・・

* * *

ノートと黄金のミュトスは鏝ぜり合いを繰り返していた。

「・・・クツ、ラグナレクが破壊されたか」

ミュトスはマニピュレーターから粒子を放つ。

「……そう、リンスはやつてくれたようね」

ミオはホッと溜息を漏らしながら迫り来る粒子を紙一重で避けていく。

「……どうやら失敗のようね？」

ノートはサーベルを抜きミュトスに切り掛かる。

「いや、まだまだ……多少の誤差は起こったが世界は私の思う形に進んでいる」

ミュトスはマニピュレーターから刃を出現させノートと鏝ぜり合いを行う。

「……どういう事？」

ノートは左脚でミュトスの腰部を蹴った。

だがそれはミュトスのマニピュレーターに受け止められた。

「君が知るべき事ではないよ」

マニピュレーターから粒子が現れノートの左脚を破壊した。

「……クッ！」

ノートは後退し間合いを離れライフルを放つ。

「そろそろ終わりにしようか……」

ミュトスはそれを避けバツクパツクの黄金の翼を広げた。

「舞え……我が不死鳥よ」

黄金の翼から合計10枚の羽が飛びノートの回りを飛ぶ。

そしてそれは粒子を放ちノートを襲った。

「……遠隔兵器!?!」

ノートは粒子の間を避けその羽にライフルを撃つ。

だが羽は避けさらにノートに攻撃を行う。

「……クッ」

ノートのライトショルダーアーマーに命中し、ショルダーアーマーが破壊される。

「さあ、幕引きだ……」

ミュトスは粒子の刃を出しノートに切り掛かる。

ノートはそれをサーベルで受け止め鏝ぜり合う。

「フッ、これで君は逃れられない……」

「……クッ!?!」

ノートの回りを羽が囲んだ。

そして羽は上、下、左、右からノートに向かい粒子の雨を降らした。ノートの機体全てに命中し、ノートはスパークし爆発した・・・
「フツ、彼女もこの世界の犠牲者だが仕方あるまい・・・彼女の存在が私の計画を歪めるのだから・・・」
黄金のミュトスのパイロットはノートの破壊を確認し、あるところに通信を入れる。

「・・・ゼニウス最高司令官、レンブラム特佐に繋いで下さい。・・・ああ、「L」と言えば分かると思いますよ？・・・ああ、レンブラムさんですか？今、ラグナレクの破壊を確認しました。それと同時にリベレイターのHEAも全機沈黙しました・・・ええ、リベレイターは滅んだと考えて良いでしょう。・・・それでは自分は今もう戻りますね？・・・ハイ、ミュトスも確認されたモノは破壊されました・・・」

パイロットの男は通信を切る。

「ええ、ヘイムダル、ヨルズ、ノート、そしてオーデインは破壊されましたよ？レンブラムさん、ですがミュトスは他にもあるのですよ？」

男は笑みを零しヘルメットを脱ぐ。ヘルメットの下からは漆黒の長髪が現れた。

そして男は、黄金のミュトスを翔け漆黒の宇宙へと消えてしまった・・・

BH17年。十年に渡る長きにわたる戦争が終結を迎えた・・・ラグナレクの崩壊と同時にリベレイターのHEAは全て機能を停止し、地球圏はようやく平和の時を取り戻す事に成功したのだ・・・

- エピローグ -

BH19年。

一人の狐の形をした仮面を着けた男が廊下を歩いていった。

男は屋敷の扉を開け、前で待っていた少年を見て驚く。

「・・・よう！遅かったな！“アキラ”！」

少年のバイオレット色の髪が風で靡く。

「リオウ・・・」

アキラと呼ばれた男、少年は溜息を吐く。

「なんだよ！そのリアクションは！？折角港まで送ってやるつもりだの・・・てっ！？勝手に俺の愛車にのるなあ！！」

アキラはリオウの言葉を無視しリオウの愛車、白のロードスターに乗り込む。

「送るんだろ？なら、急げよ？」

アキラは顎を使い言う。

「・・・テメエ、殺すぞ？」

リオウは眉をピクピクと動かしアキラを睨む。

「早く出せよ？」

「・・・そんな事言われても怒らないのが紳士ってもんだよな」

リオウはブツブツ呟きながら車に乗り込みハンドルを握り走らせた。

車は海岸線を走り波風が二人にかかる。

「で？どういう事なんだ？」

リオウはアキラに問う。

「折角拾った命、またお前は散らすのか？」

「さあな・・・だが、俺にはこの平穩が合わないだけなのかもしれない・・・」

アキラの髪が波風に靡く。

「まだ、引きずってんのか？2年前の事を・・・」

「分からない・・・だが誰かが、何かが俺を呼んでいる・・・そんな気がするんだ・・・」

仮面の下の瞳は虚ろげに水平線を見つめていた。

リオウは溜息を吐きハンドルをきり、カーブを曲がる。

身体なんだ！？色気の“い”すら感じられないぞ！？あの上から下までツルペツタンゝな身体が24歳イイイ！？有り得ない有り得ない・・・ブヘッ！？」

アキラはまたしてもリオウを殴った。リオウの鼻からは鼻血が噴き出す。

そしてやつぱり必然的に車は蛇行運転・・・

「ア、アキラ・・・何故殴った？」

リオウは左手で鼻を押さえ右手でハンドルを握る。

「俺のミオをけなすな・・・」

「なに？あの娘は君の所有物ですか！？」

「いや、保護者だ・・・」

リオウはその言葉を聞きコケツと体制が傾いた。

「・・・もういいよ・・・お前と構っているの疲れたわ・・・」

リオウは少し猫背気味な体制で車を走らせた。

それ以降車の中で彼等が言葉を交わす事はなかった・・・

* * *

フューチャー社のH E A製造施設のさらに下にウィンロッドの姿があった。

ウィンロッドはあるH E Aの前に座り込み機体の整備を行っていた。

「世界が平和になってもやはりこいつらは必要なのか？」

「仕方ありませんよ？平和は維持するのも大変なのですから」

H E Aのコクピットからリンスは顔を出し答える。

「そうですね？父上・・・ヘイトさん達が命を懸けて手に入れた平和です。無くしては行けません」

コウキは工具をウィンロッドに渡しながら言う。

「分かっているさ・・・だから“こいつら”が必要なんだろ？」

ウィンロッドは額の汗を腕で拭いそのH E Aの頭部を見つめた。

「ミュトス・ヘルか・・・まったくスズ力嬢はこんなもん何処から持ってきたんだか・・・」
ウィンロッドはため息を吐きながら作業再開した。
新たなミュトスはその時を待つかのように眠っていた・・・

* * *

「さあ、着いたぞ？アキラ・・・」

リオウは車から降りた。

アキラもその後降りる。

港にはすでに空母が一隻停まっていた。

地球国家の空母だった。アキラは空母の前に立っていた男に近づくと

「ライング・トレイター特尉ですね？お待ちしてました。どうぞこちらへ・・・」

男は歩きだしアキラを案内する。今のアキラはライング・トレイターと名乗っていた。ヘイト・ディスターはすでに死んでいる事になっていたから彼には新たな名前が必要だったからだ。

「アキラ！」

リオウは歩きだそうとしたアキラを引き止める。

「また、会おうな？」

リオウはアキラに握手を求める。

「・・・そうだな、生きていたらな・・・」

アキラはリオウの手を握る。

「じゃあ、行ってくる・・・」

「ああ、行ってこい」

二人はお互いに背を向き歩きだす。

「こちらの部屋で待機して下さい」

男はアキラを会議室のような所に待機するよう命じた。その部屋はアキラ以外誰もいなく、アキラは近くの椅子に座った。

「・・・地球国家か」

地球国家は1年前に出来た政府の組織である。目的は先刻のような争いを2度と起こさないようにするための組織らしい。

「そんな所からまさかスカウトがくるとはな・・・」

アキラは苦笑する。元犯罪者が今度は犯罪者達と戦う自分の人生の可笑しさに・・・

アキラが苦笑していると、扉が開き誰かが部屋に入ってきた。

「・・・なっ！」

アキラは入ってきた“少女”を見て驚きを隠せなかった。

「あら？此処にいたの？」

少女はクスツと笑い長い銀髪を靡かす。

「・・・！」

アキラは驚きにより言葉が出なかった。目の前に懐かしの彼女の姿が彼の瞳に映る・・・

「貴方からじゃ、はじめましてじゃないけど私からは、はじめましてなの・・・それじゃ、改めて“はじめまして”ニオよ」

そこにはミオと同じ容姿をした、少女がいた。

少女はアキラの顔を見てニコツと笑った・・・

運命の輪舞曲^{ロンド}が今動き出したのだった・・・

……END【HIGH・END・ARM】

M・FINAL：『改めて』はじめまして（後書き）

予定通り完結出来ました。一応前編という感じで終わらせていただきます。後編はまだわかりませんが投稿が出来次第投稿します。

HEA御愛読ありがとうございました。

- 紅雲 -

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4477f/>

High-End-Arm

2010年10月28日06時01分発行